名家歴訪録

上編

80
214

君家歷訣錄

周峰題

福康安

周峰

一德堂

奉主題

談言論皆珠玉

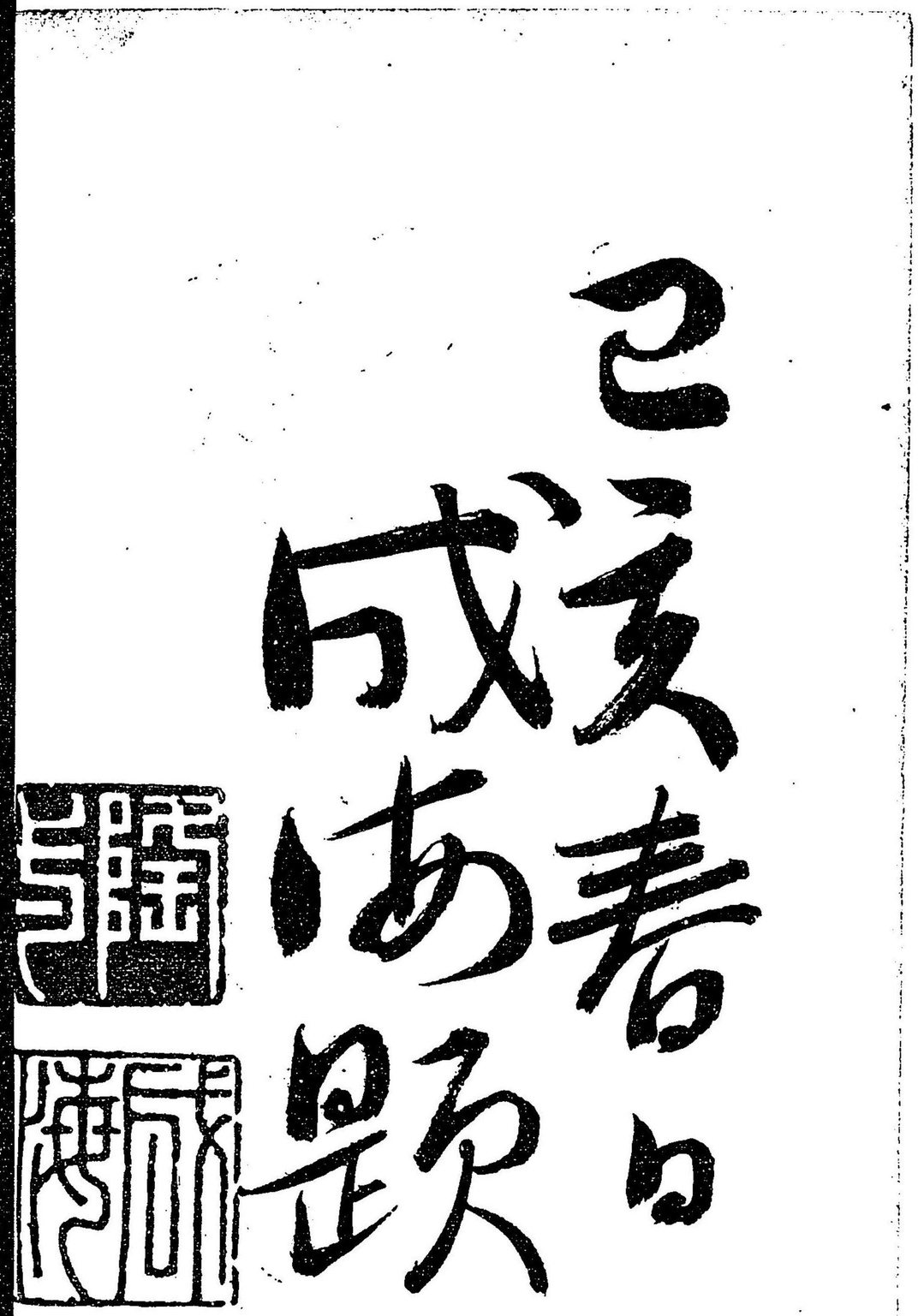
珠中邵

與友人某書 代自序

黑田天外

一翰拜呈、新綠怡眼の候、益々御清健奉大賀候。陳者今回小生が拙著名家歴訪錄を發刊仕候につき、如何なる心意の發動に因り、如何なる目的を抱き、如何なる用意用筆に依り、以て貴著を成就せられしや、舊知の爲め須らく其一肚皮を吐露すべしとの御尋ねに接し、微々破顔仕り候。固より貴兄と小生との間に於て、强て謙下するの必要も無之、詳細可申上と存じ候處、右に就ては曾て某雜誌記者に與へ、之を言明せし書翰の候へば、今其中の數節を謄寫し、之を左右に呈し候。

小生は其書の冒頭に於て、此事たる固より自から明らかにするにあれば、語意の自つから表顯に亘る處は諒恕せられよと斷はり、且つ曰く、從來我國に於ける藝術家、其他の傳記を一見仕り候へば、いづれも疎笨簡略にして、殆んど其性行を觀、其議論を徵する能はず、僅かに千



篇一律なる漢文、若くは他の隨筆中に於て、其萬一を髣髴摸索するに過ぎず、太だ遺憾の至りに有之。之と申すも、自家が自家の傳記を物するは、從來國風上相避け居る傾きあるのみならず、儒者とか詩人なれば、また自ら記するとも有之候へども、繪畫、彫刻、冶金、陶磁の諸家に至つては、概して文辭に嫻はず、其門人たるものもまた仝樣に候へば、墓木未だ拱ならずして其一生の性行逸事を擧げ、概ね煙散霧消に歸せしめ、ついに我藝術史をして索莫乾燥に陷らしめ候と、實に遺憾の至りに有之候。

小生はかねゝ此點につき慨歎仕り、茲に志を決して、現時に於る此缺典を補なひ、いさゝか後世に向つては藝術史、其他の傳記につき資料を供し、今日に在ては各道の後進者をして、先輩の苦學經營、遂に今日の名を成すに至りし所以のものを告げ、また其多年蘊蓄せる識見論議を紹介し、以て奮發興起するに至らしめんと存じ、さてこそ名家の歴訪を初め、之を記述すると相成り候。

されば記述の際に於ても聊か心を用ひ、先づ名家歴訪錄の那處にか、必らず其歳月を署し候。これ各家の識見議論も歳月により變轉進化し、決して固定する者に候はねば、其歳月を署して、以て各家が一生中、何年何月何日に於る議論たるを知らしめんとに有之候。次に各家の居宅、庭園の光景、または其來訪者に接する態度などは、依て以て各家の性行を窺ふべき者有之、一面には文字に色彩を施こすべきものなるを以て、之また叙述仕り候。次に其口吻に候。口吻を成るべく其まゝ描出するは、現時に於ても、後世に於ても、之を讀む者をして親しく謦咳に接する如き趣興を高めしむるものなるを以て、及ぶだけ其肖似に力を尽し候。次に其經歴については、上段既に申述候。次に議論については、流石名家のことて、固より名論卓説多く、世人を裨益すること尠少ならずと存じ候。然れどもなかにはまたさまでに無之、取舍如何

と存じ候もの二三之なきには候らはねど、これまた其名家が面目、懐抱の度合、限界、を示すが爲に問々叙述仕り、右に就ては一二簡短の批評を加ふるとも、また加へざるとも有之候。また訪問せし名家中、其先人に重きをおくべき者は、便宜上其方の叙述に力を用ひ候。其面貌風采も、其當時の年齢もまた必用に候へば、之またほぼ概略評仕り候。間々談話者の書畫等を掲るは、其風采を映發し、趣味を加へしめんと欲するに外ならず候。

世上紛々たる訪問錄はいざ知らず、小生が起草せし「名家歴訪錄」は、實に如上の本心目的により、如上の用意用筆により叙述する者に有之、此擧の美術藝術史上等に於て、また斯道の後進者に對し幾分か貢献神益あるべきは、小生がいさゝか自信罷在る處に御座候。

以上は小生が某雜誌記者に與へたる書翰の概略にして、貴兄に對し披瀝せんと欲する處もまた之に外ならず候。右の如くして星霜を閲する四、名家を訪ふ五十餘氏、而して今回は其中二十六氏を撰みて上篇に收め、漸次中篇下篇を刊行せんと存じ候。尚は從前訪問せしものは、小生の西都に住する爲め、多く西都の名家にかゝり候へども、小生の心中は固より西都と東京を分たず、また諸州縣の別を論せず、苟くも江湖に告げ、後世に傳ふべき名家に候へば、及ぶだけ訪問仕り、以て其目的を擴充せんと存じ候。これ實に小生が事業中の一に有之、幸ひに御一笑被下度候。

貴兄と手を東京に分ちてより既に十數年、絵山房水の鴻爪も蒼茫に落ちて、當年慘綠の天外生は、早や鬚髯二三寸に及び候、呵々。尚は刊行の上は一本遞送可仕候間、十分御批評願上候。まづは右まで、餘は後鴻に附し候。頓首。

明治己亥五月五日端午の節

故岸竹堂翁

清風與平氏

望月玉泉氏

並川靖之氏

原　在泉氏

今尾景年氏

谷口藹山翁

鈴木松年氏

久保田米僊氏

不識庵聽秋氏

內海吉堂氏

谷如意翁

富岡鐵齋翁

巨勢小石氏

清水六兵衛氏

福原周峰翁

紹美榮祐氏

森川曾文氏

伊東陶山氏

中川淨益氏

西村總左衞門氏

齋藤卯兵衞氏

飯田藤次郎氏

飯田新兵衛氏

飯田新七氏

飯田太三郎氏

飯田政之助氏

竹内棲鳳氏

鴻雪爪翁

鄂光山崇兵衛氏

達摩　小石筆

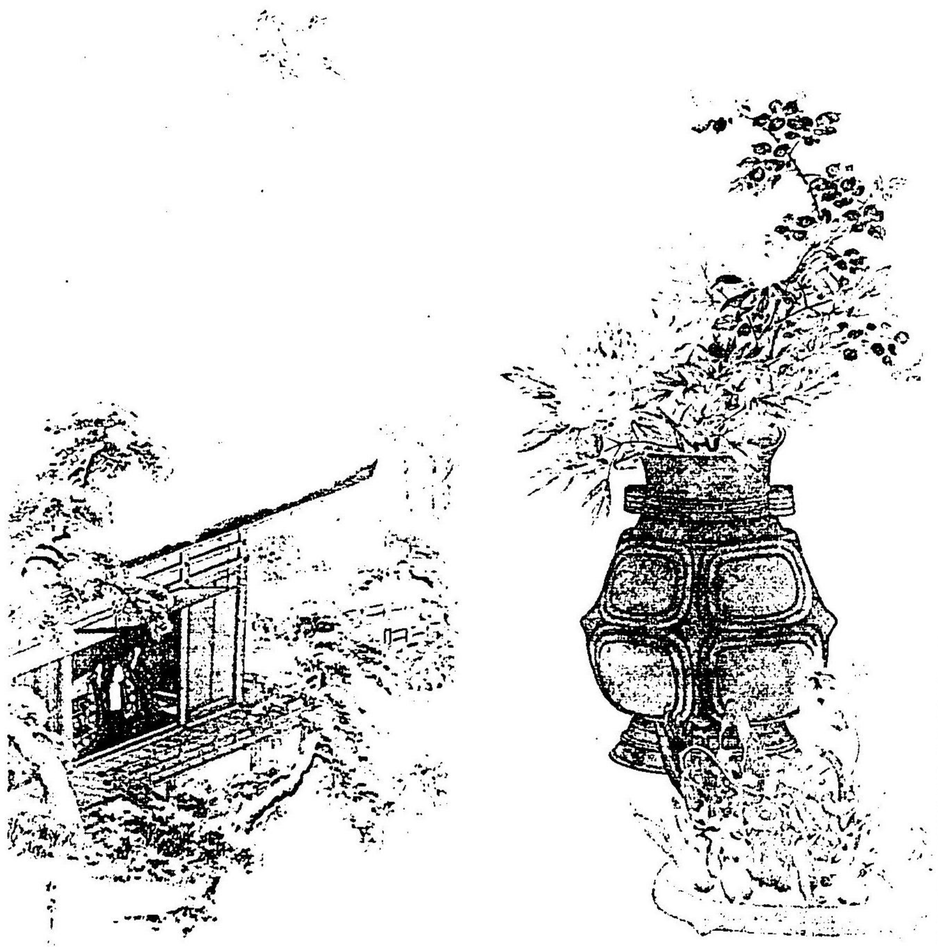
石橋獲鹿　曾文筆

碧天雁影　玉泉筆　柳塘過雨　樓鳳筆

淡月孤鳴　景午筆　雲中山水　滿山筆

達摩　松年筆

風雪山水　米僊筆



牡丹水仙　吉堂筆　清少納言　在泉筆

緒言

一本書著述の用意は、卷首掲ぐる處の與友人某書に詳悉したれば、再び贅せず。

一卷首挿入する處の畫は、諸名家の特に本書の爲に揮毫されたるものにして、得るに從ひ「アートタイプ」に附したれば、次序を整ふに暇あらず、再版の時を以て之を訂正すべし。

一名家肖像の中、赤松祐以翁一人を逸したるは、仝翁が生來撮影を喜ばざるにつき、其意に從ふなり。西村總左衞門氏に齊藤卯兵衞氏を添へ、飯田新七氏に四兄弟を添もるは、仝心一体の功績沒すべからず、從つて仝じく其風采を傳へんが爲めなり。

一表紙の題簽は細辻昌雄氏の妙筆を請ひ、其畫は竹内棲鳳氏の心匠を煩らはす。是に於て棲鳳氏は苦心經營、廣く古圖を探り、光明皇后御經料紙の下畫に據り、其配色と圖樣の筆法とに倣ひ、思ひ〳〵に

咲亂れたる秋草を描かれしものにて、配色圖樣、共に高逸絶倫を極む、こゝに書して二氏に鳴謝す。

一「アートタイプ」は圓山玄鹿館の手に成り、肖像は東京猶興社の技にかゝる。

著者しるす

名家歷訪錄上篇目次

畫家 故岸竹堂……一頁
畫家 望月玉泉……十一頁
陶磁家 清風與平……二十五頁
七寶家 並川靖之……四十五頁
畫家 今尾景年……六十三頁
畫家 鈴木松年……七十三頁
畫家 原在泉……九十五頁
畫家 谷口藹山……百〇二頁
畫家 久保田米僊……百十七頁
畫家 內海吉堂……百二十九頁
歌人 赤松祐以……百四十頁

俳家　上田聽秋……百四十五頁
儒家　谷如意……百五十九頁
博識家　富岡鐵齋……百七十七頁
陶磁家　清水六兵衛……百九十七頁
畫家　巨勢小石……二百〇六頁
詩人　福原周峰……二百二十四頁
畫家　森川曾文……二百四十三頁
金工家　中川淨益……二百四十九頁
金工家　紹美榮祐……二百五十九頁
陶工家　伊東陶山……二百七十七頁
畫家　竹內捿鳳……二百八十八頁
美術工藝家　西村總左衛門……二百九十九頁
美術工藝家　飯田新七……三百十三頁
陶磁家　錦光山宗兵衛……三百二十九頁
老禪　鴻雪爪……三百三十七頁

合計二十六名

目次終

名家歴訪錄上篇

黑田天外著

岸竹堂翁

明治丙申十一月一日、余が名家歴訪の第一着として、我國第一流の畫伯、帝室技藝員、岸竹堂翁を圓山の邸宅に訪ふ。邸は繞らすに竹垣を以てし、門を排せば通路の左右、樹木欝蒼、雜草茂生、一に其自然に任す。黑色の雌雄雞両三あり、竹欄に上り喧を負ふ。意興幽閑、殆んど仙寰に入るの想あり。刺を通じ謁を請ふ。須臾にして童子出來り、此方へと導びかるゝまゝ、翁が畫室に入る。

翁今年七十一、道貌清臞、鬚髮種々、超絶の氣眉宇の間に露はれ、一見其高人たるを知るに足る。時會ま老夫人と共に、小黄花を銅瓶に捕みついあり。余を顧み座を與へ、懇ごろに之に接す。余は恭し

く禮をなし、其黄花を捕み終るを待ち、徐に來意を告げ、其高論を示されんことを請ふ。翁靜に耳を傾け、やがて悠然として曰く、いや私などは文事のない方でムいますから、何も御話をするやうなことはムりません。と、一語謙抑、毫も其盛名を負ふを自ら知らざるもの〻如し。

既にして談緒漸やく翁が本年東京に開設せる秋季美術展覽會に出陳せし月下猫圖に及び、其東都各新聞の嘖々賛稱せるとを告ぐ。翁初めは平然、而して愕然、稍ありて曰く、どうも新聞などでは種々の事を、……然しあんまりひどいことを言ふはよくないとですな。……殊に風雅の道に於て。と、蓋し某紙上、翁が月下猫圖と、橋本雅邦の竹林雀猫圖とを比較し、翁を揚げ雅邦を抑もる太甚しきあるを以て、竊かに雅道を傷るとなすもの〻如し。翁が温厚の資質、固より左もあるべし。余卽ち問ふに、斯の如き畫を作らるゝに當り、其意匠經營、凡そ幾日、或は幾旬を費やすべきやを以てせしに。翁は答へて、夫は常にやつてゐるのです。と、鐵漿一下、蓋し平日刻として、時として心神をこゝに傾瀉せざるなく、其意匠たる皆生平の精察細觀に出で、一少時の能く構成し得べきものにあらずと云ふが如し。

翁はかく云ひつゝ、靜かに茗を煮て余にすゝめ、自ら啜り、また火鉢の灰を掻ならし、炭を添へつゝ、娓々として語り續けり。私は畫を描くに、横に倒しして描くとはない、必らず立てゝ描くのです。元來畫は立てゝ見るものであるから、横に倒して描くと、いざ描終つて立てゝ觀る時になつて勝手が違ふ。それだから大概描こうと思ふ縑素を距ること二尺、三尺、縑素が大きければ、大きな程距離を遠くする。襖子一面に馬でも、何でも描かふといふ時には、凡そ一間半も隔てるです。其處で遠くから觀て、先づ其位置を定め、これでよいと思ふ處で、燒筆で勾定める。然し遠くから見てよい位置と思ひ、

さて傍へいつて燒筆をあてようとすると、どうも其位置が穩妥かならぬようで、遠くで見るのと、近くへいつてとは思案が違ふ。……然し之は遠くから觀た方が正しいのであるから、近くへいつて少々穩妥やかでないように思ふても、之は先に定たように燒筆をあてねばならぬ。若し躊躇する心が出來て決せぬ時は、眼を瞑いで進んでも、遠くから觀て定たように位置をとらねばならぬ。

それから畫を描くに、三日で描るものなら五日かゝる。五日でよいものなら十日かゝる。まづ筆を援て描かければ、大抵三十分か、長くも四十分位ひで疲勞の出ぬ前に止てしまい、夫から外へ出て、二十分位ひ散歩するですな。……そうしてからは、また歸つて筆を把るのです。一番に悪いのは、もうこゝまで描上たから、少し疲勞れてはねるがやつてしまはうとか。又は日が薄暗がりになつてねるのに、興に任せて描てしまはうなどいふことで、之は愼しまねばならぬと

です。……元來畫は、一日は一日と經つはど、自分の疵や、悪い處が見へて來るのですから、夫を日數をかけず一氣にやるは一番悪いとです。と、瞑目以て會せば、一箇名世の一畫伯、縑素に向ひて經營慘憺、却立して注視し、點染せんとして躊躇し、布局漸やくなりて筆を把るや、神恬に、意靜に、花鳥、人物、山水等、一々腕下に飛動し來る。而も神を惜み、氣を養ひ、半時間許にして筆を擱し、更に杖を曳て長岫に逍遙、深林に低回し、或は松濤を謂聽し、或は幽花を細檢し、神識、茫、興會浩然、また歸つて筆を把り縑素に對するの狀、活躍して目睹する如くならずや、こゝに至て余は興趣の津々たるを禁ずる能はざるなり。

翁又曰く、それから一つの畫を描かけて、未だ終らん中に、外の畫を描くことは之また悪いとです。假令ば襖子に虎二疋を描のですな、仝じ虎にせよ、一疋を描終らぬ中に更に他の虎を描かけることは、

どうしてもいきませむ。余問ふ、精力が分れるからでムいますか。翁曰く、そうです。余問ふ、夫では一の畫を描きかけて出來しない間は、幾日あつても他の畫をお描きになりませんか。翁曰く、まアそうです。

余更に問ふ、先生などは少時より畫道を研究なされて、今七十餘年まで至り、殊に動物に於ては當代獨歩を以て推されていらしやるとでムいますが、夫でも今雞とか、猫とかとをお描きになります際には、更に實物に就て御精察なさいますか、または胸臆に探つて御描きになりますか。翁曰く、夫は實物に就て精察なければなりません。元來全じ雞でも、其他の物でも、時候によつて羽色、其他も違ふ。其時によつて、姿態は種々である。また觀察する此方の心地も時々異なつてゐる。夫ですから、今雞でも何でも描かふといふ場合には、また仔細に觀察せねばなりませむ。

假令ば月は圓いものであるから、之によい加減に雲でもあしらふて置けば、月の畫が出來るかといふに、決してそうでない。月は全じ圓い月でも、其夜の光景によつて、朧ろのともあれば、爽やかなともあり、叢雲が翳つておれば、その叢雲のかゝり盤梅もまた種々である。また見る方でも、愁ひて見るのと、面白く興じて見るのと、其他、其時の心地次第で、見ようも種々違つて來る。

私は年々嵐山へもきますが、ついに同じ嵐山を見たことはない。……いつも嵐山が變つてゐる。また前年見出さなかつた嵐山の妙所を、今年は不圖見出すことがある。それは此方の觀察る眼が進んで來るので。と、超詣の言、宜しく言外に於て之に默契すべし。

余また問ふ、寺院の天井、欄間などに天女、或は飛龍などの大畫が描てありますが、アレはどうして描くのでムいますか。翁曰く、アレは描てから天井なら天井に張るので、……岸駒が或寺の天井に描き

ました時は、まづ描ふと思ふ畫を紙の上に小さく描て、之に縱横に碁盤の目をひくのです。夫から一方の天井にも、全數だけの碁盤目を大きくひいて、天人ならば、寶冠は幾條目から幾條目の右にあるとか、左に出てゐるとか、玉帶は幾條目の那邊にあるとか、一々位置を見較べて描くのです、そうしていなければ旨く描けません。と、翁は之に續で語つて曰く、すべて畫を描くには、どうしても下畫は綿密になり過る、彌々之を眞成に描かふとするには、心を用ひて餘程省かねばなりませぬ。と、蓋し下畫は其整齊にして些の縫漏なきを求む。而かも之を描くに當り、間々畧筆を以て之を描破するは、畫面の拍塞板滯を避け、一段の神韻をして更に縹緲飛動せしめん爲なるべし。擧て以て翁に質す、翁之を首肯す。

余又問ふ、畫家などは多く諸國を遊歴して、名山大川を跋渉するものでムいますが、先生も少年の時には御遊歴をなさいましたか。翁曰く、畫家は隨分遊歴も大事でムいます。……然し、私は一向何處へも出ませんでした。……が、穴勝ち諸國を遊歴したからと、夫でよいと云ふものでもムいませむ。隨分わざ〳〵遠くへもかずとも、近くに結構な材料が澤山あるのです。……よく氣をつけて觀れば、此園中にも今まで氣のつかなんだ、面白い花があるかも知れませむ。と、之れ翁が安心立命の處。其畫の清淡宕逸の一格に囿する如きも、或は之に坐す。余は一面に其精察に服すると仝時に、一面は此精細の眼光を以て、更に諸國の名山大川を縱觀し、其靈氣に觸着し、其天趣に冥合し、以て畫境を拓開變化せざりしを惜む。

余また問ふ。頃日の日本畫には、間々犬などを描て西洋の畫法に類するものがムいますが、日本畫と西洋畫とは、根底から違ひますか。または互ひに融和する時期がムいますか。翁曰く、夫について一つのお談話があります。いつか山高さん(信離氏)のお話に、この頃は奥

州やとか、其他諸處の牧馬が、種が混合するものであるから、一向に血統が判知らなくなつたと。其處で私の言ふには、畫もそれと全じでないか。現今は狩野やとか、土佐やとか、其他いづれも一格を守るものが尠ないから、自然に混合して判知らなくなる。西洋畫といふても全じで、若し此方に充分西洋畫をつかいこなして、……恰度胃の壯健なものが、何を食べても中傷らぬようによく嚙こなせば、西洋の畫法を取ても、畫面に現はれた處は最早西洋臭くない筈だ。然し大抵の者は、其處までの力がないから、とりに行つて却つて取られるのです、アハヽヽ。と、以て翁が意見の在る所を窺ふべし。

畫談終つて、翁が鄕里彦根に及び、余もまた彦根の出生なる旨を告ぐ。翁乃ち詳さに其處を叩き、相語るに及んで、翁が出生地は余が家と僅か四丁許を距て、余が亡父は翁より後るゝこと三歲、其少時相知なることを知るを得たり。翁曰く、これは珍らしい方がお出になつた。と、余もまた情懷の依々たるを禁じ得ざりき。清談二時許、即ち辭し歸る。

望月玉泉氏

仝年十一月十日、畫伯望月玉泉氏を室町丸太町下るの邸に訪ふ。とり散けては居りますが、どうか此方へとのことにて、二階なる畫室に導びかる。女弟子と覺しきが、次の室にて揮毫なし、氏もまた金屏風に何か描きつゝありしが如し。さア此方へと云はるゝまゝ、座につきて寒暄の挨拶をなし、徐ろに來意を告げ、且曰く、御當家は歷世の名家でムいますが、何か面白い逸事でもムいましたら、承たまはり度存じます。と、氏曰く、いや、さして逸事といふ程のこともムいませんが、私共より三代前になる玉蟾が、初めて宮中に召されましたことでも申上げませう。恰度それは櫻町院さまの御代でムいまし

た。……御承知でもムいませうが、玉蟾は畸人傳の端にも出て居ました、其時はひどい貧乏で、天窓には雨傘を被せて、畫室の傍は鼠の糞ばかり、風姿はといへば、白木綿の温袍に、薄汚れた丸ぐけの帶をしめてゐるといふ有樣で。其處へ勸使所から御使が參りまして、此度其方に繪畫の御用を仰せつけらるゝから、明日麻上下を着用して出頭するようにとのことでムいました。處が玉蟾の申しまするには、忝けなき仰せの趣き、不肖の身にとりましては眞に有難い仕合ではムいまするが、御覽の如き貧家の体裁、麻上下着用と仰せられましては、兎とも調のへることが出來ませねば、殘念ながら御斷を申し上ますと申しますと。御使がお歸りになりまして、玉蟾といふは眞にひどい貧乏畫師で、あの樣な者に仰せられずとも、從來御用を承たまはる土佐か狩野に仰せられます方が宜しうムいませうと申上に成ますと、いや、たつて玉蟾に畫かせい、麻上下がなければ其方のを借して遣せいとのことで、再度の御使が參りました。

そこで玉蟾が、左はどまで仰せられますとならば、眞に冥加至極でムりますと、麻上下を拜借しまして、翌日宮中へ伺候致しますと、直に御歌會御當座の御題なる、雨中竹、雪中松の二つの圖を描けい、いづれ下繪は一應伺ふようにとのことでムいましたが。玉蟾の申しまするには、一應引取りまして、改めて下繪を伺ふことになりますると、また麻上下を借用致さねばなりませぬから、一層此席で直に下繪を伺ふように致したう存じますと申上ますと。夫は面白いから、それでは直に伺ふようにとのことで、早速卽席で二つの下繪を二通りづゝ描きまして伺ひました處が、大きに叡感に叶ひまして、御夜食御酒頂戴仰つけられ、翌日いよ〳〵本畫をさし上ますと、益々御思召に叶ひまして、夫から引續いて御繪を調進することになりました。

氏はかく云ひつゝ、令息玉溪氏を呼出し、玉蟾氏が下繪の一通家に

藏せるものを出さしめ、壁上に掲げ余をして之を觀せしむ。余就て之を觀るに、固より下繪のことて、只風雨の颯然として琅玕の披けると、白雪の皚々として重く青松を壓する形似を認むるのみにて、墨色、氣韻なぞ毫も掬すべきなし。たゞ一種歴史的の感情にて、これが當代の名家望玉蟾が洒々落々の襟懷もて、宮廷の内、公卿環視の下に在り、毫を把り墨を吮ひ、傲然一揮して即ち成りしものと思へば、筆墨徑蹊の外、更に其高風の欽仰すべきを覺もるのみ。

氏また語つて曰く、當時宮中には御床の間といふものはムいませんから、土佐家でも狩野家でも、掛物の御用といふはムいませなんだ。玉蟾の承たまはりましたのは、御歌會御當座の御題で、それをお懸けになつて公卿の方々に歌を詠そうといふ御趣向で、……またお出入の繪師でも、杉戸や、御襖の御用などいふものは、常にあるものでムりませむ。只毎年年頭には蝙蝠扇と申して、五本の御扇子を繪師五名で描て調進致しますが。其地の色は蘇枋、紫、薄萌黄、黄、紅の五色で、年によると蘇枋などが白となることがムいます。また御月扇といふが、月二本づゝで年に二十四本、地の色は白ですが、……一本づゝは、お取替の御ようでも申すのでムいませう。いづれも繪畫は、砂子泥引に極彩色でムいます。

余問ふ、先生なども少時から宮中の御用畫をお勤めになりましたか。

氏曰く、そうです。親共のお蔭で、安政二年五月宮中御造營の節……丁度私が二十二歳の時、初めて御屏風の畫を仰付られ、其時に有虞二妃の圖と、舞樂の圖を調進致しました。また　今上御即位の時、即ち慶應三年八月に……私が三十四歳で、金の御屏風一双に、萩に臥猪と、藤に熊の圖を調進致し。同年十一月、准后御新殿御間の御用畫を仰せ付られ、これに山茶梅戲犬の圖を調進致し、其度毎に特別の御褒美を頂戴致しました。……今上御即位の時などは、諸藩の士

が劔附鐵砲や、白刄で宮中を固めて居りますので、其間をよう〳〵通して貰ふて、御誥を納めたとでムいます。と、當時を回顧せば恍として一夢の如く、御遷都以後は南内蕭條として、櫻花空しく仙洞の春に匂ひ、明月徒らに宮門の秋を照す、また束帶長裾を曳くの公卿なく、赤髮長劔を横ふ衞士を見ず、今昔の感、時々自から老懷に來往するものあらむ。

氏曰く、何の道でもそうでムいませうが、殊に畫などは十分苦しまねばなりませむ。先代の玉川が、或日に平生懇親に致しまする小野善九郎といふ、これは絲物の問屋で、幕府時代に三井やの、大丸などゝ並んで爲替方を勤めてゐた小野組の隱居になる人で、固より豪家のことでムいますから、所藏の書畫も澤山あり、諸道具なども餘程臻つたものでなければ用ゐませんが好事の方で、……平生茶の湯が大好でムいまして、先代の玉川も仝じく嗜んで居りましたから、始終往來をして居りました。……そこで或日に遊びに參りました處が、其茶室の一間餘もある床に、常信の描た細幅で、紅葉した蔦が上から一すじ眞直にさがつて、その中程に白頭翁が一羽とまつてゐるといふ、……之は善九郎さんが秘藏の一幅を掛けてありましたが。其畫が何ともいへぬよい出來でムいますから、玉川が眼も離さず大層に感心致して居りますと。善九郎さんが云ふには、玉川さん、私は別に茶がけの横幅をこしらへたいと思ふのやが、どうか横幅に茄子を三つ描て下さらんか。御禮は何程でもするし、またお堅みのものがあれば何でも上るから、どうか十分骨を折つて、無類といふ茄子を描て下さいとのことで。玉川も承知致しまして、いかにも夫では描きませうと、二三日してから描て持て參りますと。善九郎さんが見て、……ウム、いかにも之は茄子ぢや、茄子には違ひない。が、……然しこんな茄子なら、小便とかへてもあんありそうなものぢや。私しの賴むのは、

小判幾枚で三箇を買ふといふ茄子やから、此茄子ではいかんといひますので、夫ではとまた描て持て參ると、此茄子でもいかん。描て〳〵、これではいかんと請取られんです。……其頃未だ私は幼年でムいましたが、亡父が大層困つてをるのを覺へて居ます。……どう〳〵同じ茄子の畫を凡そ百四五十枚も描ました中で、自分も之ならばと思ふものが一枚出來ましたので、夫を持て善九郎さん處へ見せに行きますと。善九郎さんも熟々見て、……ムヲ、これはいかにも無類の茄子ぢや。此茄子は外の畝では出來ぬ、これは望月さん處に賴まねばなる茄子ぢや。と、大層喜んで、厚く謝義を致されましたが。玉川が沒しました後、私しも月の畫について、此隱居に辛く苦しめられたことがムいます。

この善九郎と申す隱居は毎年、……今でいへば舊曆の八月十五夜に、親戚知人などを集めて月見の宴を開かれますが、どうも此十五夜には、得てして曇ると　雨が降るとかして、極よい明月といふとは拗ないもので。そこで善九郎さんが私に云ひますには、玉泉さん、貴郎は姓も望月であるから、どうか全紙に明月を一つ描て下さい。そこで雨が降らん時は其掛物は出さないが、若し雨が降るとか、また酒宴を開かむとする間際になつて俄かに月が雲に隱れるかしいて、あたら興がさめようとする時には、貴郎に描て貰ふた明月の掛物を懸けて、夫で月見をするつもりやから、どうか骨折て描て下さいと云はれますので。私も承知は致しましたものゝ、未だ其頃は漸々二十二歳でムいますなり、殊に全紙に明月一つ描て、雲さへ少しもあしらはぬのでムいますから眞に六かしうムいます。漸々一二枚描て善九郎さんに見せますと、この皮肉な隱居なか〳〵よいと言ひませむ。成程之は圓いから明月かも知らんが、之なら其邊の圓窓を見ておるも全じとで、また私等の樣な素人でも、紙の上に圓盈を伏せて、

繪具をつけて貰ふた筆で周圍を塗抹れば出來そうに思はれる。……全体月といふものは動かねばならぬ。私の家では毎年十五夜には薄と紺菊を捕るが、其明月の掛物を懸た處で、如何にも其明月が薄原の中から漸々動ひて上つてもく樣に見へねばならぬ。どうか動く月を描て下さいと云はれるのです。そこで私も痛く苦しみまして、時には中飯も下さらずに色々と工夫を致しましたが、漸々に描上て送つたことでムいます。

處が六七年前に、尾張の禪僧が參りまして、どうかお目に懸り度と申しますので面會を致しますと、其禪僧が袖の中から一枚の紙を出しましたが、其紙に○の中に、丶一つ打てあるので、先生これは畫でムいませうか、また字でムいませうか、それとも何でムいませうとの難問でムいます。そこで私も熟々と見ておりましたが、私は畫家のことで外の事は知りませむが、……私に言はせて見れば、やはり之は畫でムいますな。丶、丶、畫ならば何の畫でムいます。左樣、やはり圓いから月か、玉の畫で。そんなら此眞中の黑いのは何でムいますか。さア、夫でムいます。

元來月にせよ、玉にせよ、圓い物を描くには、其中心の一點に精神を籠めねばならぬ。中心の一點に精神を籠めて、固より、……紙なり絲なりの上に描くのですから、平面いものではあるが、夫を我心で「まるみ」のある樣な心地で描く。……尤も中心に丶を打つでも何でもありませむ、只描く時其處に精神を籠る心地だけで。……それで前申しました善九郎さんの動く月、上る月といふものでムいます。たゞ平面いばかりの月ならば凝定として居りますが、この中心に精神の籠つた月ならば動きも上りも致しませう。これが若い時私が善九郎さんに苦しめられた御蔭で、あの人が月を描してくれましたから漸やく此答へが出來ましたので。……すると禪僧が大層感心致しまし

て、禪宗の奥儀でも丁度其通りであると、種々談話をして、痛く喜んで歸りました。と、古歌に曰く。分上る麓の道は多けれど、仝じ高嶺の月を見るかな。道本より圓通、万法これ一如、苟も論量比較の境界を過て、無礙三昧に超入せば、何の路徑か以てこの皎々たる月明に對すべからざらんや。善九郎氏は賞鑑より入り、禪僧は佛道より會し、而して玉泉氏は技より進む、余やまた文辭の上より之に契すといふべきか。呵々。

余また問ふ、一つの畫を描かふとなさる際には、如何にして思をお搆へになりますか。氏曰く、夫は色々でムいます。或は凝坐として考へることもあれば、また酒を飲で考ることもあり、或は烟草を喫で考へることもある、其他これといふて定つて居りませんが、烟草を喫で重くろしい、所謂「もつさり」したといふ方でムいますから、畫具抔でも打詰てつかふでないと氣が濟みませぬ。一つの鷺を描きますにも、表裏から胡粉を塗て、夫から毛描きをするといふ方で。……左様でムいます、青綠山水などは、無論表裏から繪具を塗ります。元信、山樂より、探幽齋などに至りますまで、皆この表裏から繪具を塗て置ますから、假令それほど年代が經ちましても、彩色が麗妍で畫がついたようになつて居ります。……そうして置きませんと、少し年代が經て繪具が剝ぎると、まことに見苦しくなるものでムいます。

岸岱翁の云はれましたには、眞個に烏雞でも描ふと思へば、其烏雞が一貫目の重みのあるべきものは一貫目、七百目のものは七百目といふ風に、烏の目方まで畫面に見へる樣でないといかむ。連山（養子）の畫はうまいが、兎角淺薄でどもならぬ。と、そこで或時に連山が畫帖に鹿を描きましたのを見て、此鹿は秀吉公の歌と仝じで「奥

山に紅葉踏分け鳴く螢、しかとも見へず燈火の影」だと笑はれました。何にせよ繪具でも何でも、十分念を入れて描て置きませんと、五百年はさておき、五十年位で早や消てしまひます。それ故私などは、假令重くろしふて、「もつさり」で今時に向ませんでも、死後に見苦しふない樣にと心懸て描くとでムいます。と、流石に大家の抱負見識、尋常汎々たる畫家の識る處に非ず。而も其一味重厚の畫格、この根抵に依て而して來る。余は竊に以て晉南畫の文に比す。

氏は發に平安百景圖の大作あり、明治二十一年に第一圖を描き、二十四年十一月二十三日に至り全く成る。此日其船岡捕秧、加茂曉靄の二圖を觀る。一は小丘鬱蒼として、華表高く聳へ、農婦三五俯して秧を插む。一は隱霧惝恍として、水氣糢糊、線上猶ほ濕ふあるが如し、蓋し妙品なり。聞く追て畫譜となすと。又百瀑を描くの擧あり。其日光諸瀑を探るや、瀑水を瓶に盛り、歸つて其水を以て畫きしと、好事傳ふべし。談話二時許、歸るに臨み、氏贈るに自畫小幀、並に畫扇を以てす。越て數日再び氏を訪ひ、酒間重ねて聞く處あり、併せ記す。

清風與平氏

仝年十一月三十日、黑き雲の斑らにひろがりて、一時雨ハラ〳〵と清水塔畔を掠め、斜にさと降そゝぐ中を腕車を驅り、帝室技藝員清風與平氏を五條坂の宅に訪ふ。入口なる暖簾に、如意老人の筆にて清風廬の三字を書す。墨痕瀟洒、頗る觀るべく、意興既に凡に非ず。刺を通じ謁を請ひ、二階の一室に導びかる。

室は周圍に戾棚を設け、花瓶、香盒、水指、急須、其他諸種の陶磁器、卽ち青磁の淹然として古なる者、花釉の燁然として鮮なる者、黃彩の雅澹なる者、白色の清澄なる者、一々整々として陳列し、恰

かも百花の亂れ開くが如し。矚目の間氏出來る、即ち初對面の挨拶をなし、談は直ちに支那陶磁器の沿革に入る。

氏曰く、支那に於ては宋の時初めて青磁が出來ましたので、其以前は釉藥を塗た陶磁器は無つたらしく考へられます。夫から大明になりまして、永樂、宣德、成化、嘉靖など、いづれも工業が進みました。錦襴手は永樂の時出來ましたので、所謂官の御用品で。また藍の染附は成化の頃に出來ましたが、之はなか〳〵雅致のあるもので、茶家などは大層賞美を致します。それから下つて万曆になりまして、五彩の磁出しを致しましたが、雅致といひ、精巧といひ、大分劣つて參りました。やはり陶器抔も、時世に連ますものと見へまして。夫れから大清の康熙、雍正頃になりまして、恐らく盛美を極めました。……支那古代から今日に至りますまでい、この時代ほど盛んであつたことはムいませむ。それ故歐洲にせよ、諸外國にせよ、皆此時代のものを以て陶磁器の模範と致します。……その後釉藥、染附物は種々變化致しましたが、近頃になつては一向いきませむ。

ハイ、朝鮮の陶器は三島出と申しますので、石燒の藍染附はムいませむ。交趾も古い處はようムいます。……ハイ、呉須は染附呉須と、赤色の古須とありまして、相當に面白いのがムいます。……青磁は大清になつてから、一向よいのがムいませむ。

主客茗を啜つて、談は一轉せり。氏曰く、維新の前後などは、當地でも重に唐物の模造を致しましたので、夫は茶方より骨董の方が、よけいに甚うムいました。假令ば青磁でも、白磁でも、此方に立派なのが出來て無銘でムいますと、直に唐物として賣りますので。そうする方が價がよいものでムいますから、……然し全然で何とやらの力持をするようなもので、私は忌々しく、肝に觸つてなりませんから、其頃より反對を致しました。

余更に問ふ、どうかあなたの御履歴を承たまはり度ムいます。氏曰く、いや、さして申上るほどのこともムいませんが、折角の御尋ねでムいますから、少しく申上ますれば。私は嘉永四年に播磨國印南郡大鹽村に生れまして、父は處士で岡田良平と申し、私は其二男でムいます。良平は號を得鳳と申し、圓山派の畫を描ましたから、私も幼年の頃より、繪畫が好でムいまして、田能村小虎について學びました。處が慶應二年で、即ち私の十六歳の時でムいましたが、全鄕人で田中と申し、陶磁器の商買をして常に京都へ往來しておりました者が、不圖私の宅へ參つて申しますには、京に清風といふ名高い陶工があつて、其家で繪畫や陶器の好な子があつたら、養子にしたいと望んでゐるが、此方の御二男をおやりになつてはどうかといふようなことで、そこで私も行て見ようと思ひ、父も承知致しまして、全年に田中について京都に上り、清風家の養子となりました。これが抑も私が陶業に入つた始めでムいます。

それから日々に陶磁器を造ることを學び、隨分苦勞を致しましたが。明治五年、即ち私が二十三歳の時に、先代で、義兄に當る五溪と謀りまして別に一家を起し、自ら清山と號して獨立で製陶に從事し、少しは世間に名を知らるゝようになりましたが。明治十年に至つて、五溪は不幸にして病沒致しました。夫で其臨終の際に私を枕元に招きまして、私も父祖の業を繼で、もく〳〵大に爲すあらんと思ふてゐたが、不幸にして生命も且夕に迫つて來た。ついては私が死後は、どうか汝が私に成替つて、十分この陶業を盛んにしてくれとの遺言で、私も一旦は辭はりましたが、どうも聞入ませんから、其死后になつて遂に、清風の本家を繼ぐことになりました。

それから益々陶業に力を盡し、種々研究致しましたが、元來私は靜寂な處が好でムいますから、間暇さへあると、獨りで郊外や、山林

の中へぶらりと出かけまして、それで製陶の原料に供すべき土石があれば、持て歸つて燒て見て、そしていろ〳〵土質や、釉藥の試驗を致します。その中にはまた頗る面白い、古來からない光色などを發見致しますので。一日のことでムいました、私は未明に家を出て、朝露を踏んで高雄山へ上り、例の如く石片や、土塊を採集して餘念もなく研究して居ますと。忽ち茂つた林の中から、清風さんといふて飛出す者がムいますから、驚ろいて見ますと、それは全業の友人でムいます。それで私がいつこゝへ來たのかと尋ねますと、其友人の中しますには、實は私はいつも君が製陶の技倆に感服して、どうしてゐゝいふよい物が出來るかと、其研究の方法が知りたさに、今日は君に知られないように、そつと後ろから跟て來て、そして樹の陰に隱れて、君のすることを見ていたのやと申しますから。私は笑ふて、之はなか〳〵狡猾や、然し私には別に秘傳といふものはない、唯一事一物決して忽かせにせず、研究に研究を重ねて、之を製品の上に應用するのである。と、夫から友人と草を藉て、これまで自分が研究發明した大半を談話致し、其友人も大きに益を得たと、痛く喜びましたことがムいます。

また私が思ひますには、支那の製陶の原料など、なか〳〵よいものがムいますが、然し我國でも隨分求めたら得られないことはない。何でも分拆化合の法を知らねばならぬと、夫から大に化學に志しまして、いろ〳〵分拆化合の方法を研究し、漸次に種々彩釉の製法を發明致し、之を百花錦と總稱しまして、いろ〳〵のものに應用することになりました。それで明治五年以來、發明、若くは改良致したものを擧ますれば、さつと此樣なものでムいます。

明治　五年　一月　太白磁渙白釉ノ製土及浮起紋彫刻
同　六年　一月　百花錦釉秘畫及墨畫ノ製法

同　年　四月　宜興製窯藍海鼠紫海鼠釉ヲ創製シ燒法ヲ出ス
同　七年　三月　細鱗紋及八重環瑤等ノ法
同　年　五月　白磁大氷裂製ノ燒法
同　八年　三月　朱泥烏泥ノ製土燒法
同　九年　一月　淡墨質陶器白磁花紋ヲ散做シテ內外貫徹ノ製法
同　十年　三月　白磁ニ白磁ノ紋樣透明ノ法
同　十一年　二月　辰砂釉及烏磁釉ノ燒法
同　十二年　六月　葵花釉陶磁ノ燒法
同　十三年　十一月　百花錦磁ニ金襴及極彩色ノ畫又ハ石摺白畫ノ法
同　十四年　二月　同百花釉ニ大氷裂製紋及細鱗紋ノ製法
同　十五年　一月　秘色磁破釉ノ燒法ノ改良
同　年　四月　淺絳色釉畫及彫刻象眼
同　年　六月　陶磁器金盛ノ製法
同　十八年　十月　紫磁釉ニ金襴畫ノ製法
同　十九年　一月　紫釉ニ白釉描畫ノ燒法
同　廿年　二月　陶磁珊瑚釉ノ燒法
同　廿一年　三月　紫釉ニ銀畫ノ燒法

同　廿二年　一月　黃釉青花釉ノ燒法
同　年　同月　青花磁ニ珊瑚釉ノ燒法
同　廿三年　五月　玹釉ニ青花磁ノ燒法
同　年　三月　陶磁櫻花彩釉ノ製法
同　廿四年　二月　同天晴色釉製ヲ出ス
同　年　二月　白磁本窰堅畫ノ製
同　廿五年　六月　同瓏白銑白釉彫刻畫製法ヲ成ス
同　年　十月　同花磁淡彩彫刻畫ノ燒法
同　年　十一月　琅玕磁ニ浮起紋製ヲ出ス
同　年　同月　紺磁金銀泥ノ製燒法
同　廿六年　三月　天目釉瀧條班之製法
同　年　四月　同降雨班之製法
同　年　五月　同羅龍班之製法
同　年　六月　國色磁陶磁之製燒法
同　年　十月　煥白磁淡紅釉之製燒法
同　年　十月　姚紅磁鮮赤釉之製燒法
同　年　十一月　葵花釉紫色畫紋之燒法

同　年十一月　魏紫釉陶磁ノ燒製法
同　年十二月　黑釉陶磁ニ黃色紋之製
同　年同　月　黃釉陶磁ニ黑色紋ノ製
同　廿七年　二月　彫刻花紋本窰若彩之製
同　年　五月　月寧青磁彫畫ノ製法
同　年同　月　陶磁鰐皮釉ノ製法
同　年　六月　磁製同釉ノ燒成法
同　年　九月　青磁白釉筱入紋ノ燒法
同　年十　月　本窰紫釉氷裂紋ノ製法
同　廿八年　一月　水色釉魚紋及貝盡シ浮起紋製法
同　年　二月　青磁堅畫ノ燒成法
同　年　二月　青花磁鑾發紋大花瓶ノ燒成
同　年　三月　曙色淡彩釉本窰ノ燒法
同　年　四月　煥白磁百虫百蝶ノ彫刻製法
同　年　三月　青花磁曙色淡彩ノ製法
同　年　四月　茶葉磁之製燒法
同　廿九年　二月　藍磁彫刻紋之製法
同　年　三月　藍磁黃色畫之燒法
同　年　三月　黃磁本窰製燒法
同　年　四月　黃釉及茶色釉玩瑤紋之製
同　三十年　一月　金花點磁釉製燒之方法
同　黑磁金星點製燒之方法
同　同飄雪點製燒之方法

勿論發明と申しまする以上は、從來ない法でムいますが、また支那にあつても、日本に曾てないものを考へ出しましたら、これまた發明といふてもよいかと思ひます。……中には少し變ましたばかりで、發明と申すも如何なものがムいますが。

それで御存知でもムいませうが、明治十二三年から十七八年にかけて五六年の間と申しまするものは、我國の外國貿易が一時非常の好況を呈しまして、殊に陶磁器の如きは尤も外人の嗜好を惹起し、精粗良否を問はず續々買入れました處から、遂に粗製濫賣といふ流弊

を生じ、いづれも競ふて外商へ賣込ました。當時私も彼の商人に屢々訪はれまして、是非撥出販賣をせい、また商況をも視察してくれいとのことで、あまり度々申しますから、心中進まぬながら一度行て見ますると、かねて思ひ居りました如く、我商人は非常に外人に屈辱され、商權は全く蹂躙せられて居りまするし、殊に粗製濫賣といふことも、ほんの一時の利益に止まつて、行々は大害をなすことと考へましたから、夫で斷然と撥出の念を絶ち、若し我製品にして意に適せば、此方の店へ買ひに來るがよいと、專ら引つけ主義をとり、一意製品の改良に心を注ぎました處から、其後粗製濫賣から起りました貿易界の恐慌も免がれ、自家の眞價も普く世人に知らるゝことになりました。

それで明治十七年、甲第十九號、及び第五十號の布告に基き、組合を設けまする際に創立委員に撰ばれ、全十九年に工務委員となり、

白磁櫻花紋瓶

青磁平磁茶壺花瓶

英舟模寫

續ひて工部組長の職につき、聊か微力を効しました。また仝業の有志者と謀り、組内陶磁器蒐集場を設けて、公衆の縱覽に供し、傍ら仝業者の參考に資しました。また卒先して毎月研究會を開き、以て製造上の事を講究し、毎年秋期に際しては、品評會を開き、益々斯業の改善進歩を計りました。其後内外各地博覽會、美術共進會等の開設がムいますと、いつも出品致しまして金銀等多くの賞牌を受け、また審査員等を囑托されまして、及ぶ限りは心力を盡し、遂に明治二十六年九月十八日に、宮内省より帝室技藝員の御辭令を蒙むり、年金を下賜せらるゝことゝなり、仝二十八年三月十日には、また綬褒賞を賜はりました。と、其文は左の如し。

京都市下京區五條通五條橋東五丁目　清風與平

夙ニ名匠ノ後ヲ襲ヲ力ヲ塼埴ノ工ニ竭シ清水ノ窯陶ヲシテ最モ良善ノ域ニ漸至シ遠ク漢土ノ製ニ凌跨セシメソコトヲ期シ覃精鋭思遂ニ萬種彩釉ノ製法ヲ發明シ之ヲ百花錦ト稱シ隨手應用ス意匠斬新品質純麗大ニ中外人ノ清賞ヲ博シ聲價益々騰リ販路愈々廣ル且其新方ハ敢テ自ラ之ヲ秘セス汎ク衆工ニ示シテ參考ニ資シ歳ニ月ニ同職ヲ會シテ或ハ陶法ヲ研究シ或ハ窯器ヲ品評シ多方誘掖以テ斯業ヲ毗益スルコト尠トセス其他屢々博覽共進諸會ノ委員ニ擧ラル等詢ニ實業ニ精勵シ衆民ノ模範トス云々

以て氏が斯業に於る鐵案となすべし。氏は實に美術工藝界の人傑なる哉。

氏また其取調にかゝる、清水製陶の沿革を示さる。即ち之を左に錄す。

平安城京燒清水製陶沿革

皇國製陶の事たる、太古は邈たり、考ふべからず。神武天皇椎根

津彦命に勅し、大和天の香倶山の土を以て五器を造り、丹生の河上に於て天地を祭らせらる、其五器は窪手、平瓮、八十平瓮、太瓮、手抉といふ。以後代々の天皇土師の宿彌、土師の連（土師は陶官）をして陶器の製造を司どらしむ。雄略天皇十七年、土器、清器の別を定めさせられ、清器は釉藥を施し、光澤あるもの、土器は燒〆の陶器にて、釉藥なきものとす。

聖武天皇の御宇、僧行基勅を奉じ、洛東愛宕郡小松谷清閑寺村字茶碗坂に窯を築き諸の土器を造る。桓武天皇延暦年中に至り、窯を洛北鷹ヶ峯に移し、以て平安城の碧甕を造り。尋て後島羽天皇の元暦年間、更に洛南深草の地に移窯し、諸の土器を製す。而も其製法頗る粗にして釉藥なく、所謂燒〆の類なり。

降て後桃園天皇寶德年間に至り、小松谷清閑寺村の住人、音羽九郎右衛門なる者、茶碗坂の遺跡を發見し、更に深草の窯を移し、

專ら製陶に從事す。其製品未だ堅良ならずと雖も、稍々全きを得たり。此時に當り、澁谷元吉なる者あり、之が改善に苦心し、竟に釉罩の製を發明し、盛んに諸陶器を製出す。尋て天正、慶長年間に至り、正意、万右衛門、宗伯、六左衛門、宗三、源介、源十郎等の名工輩出し、皆陶業に從事す。當時また茶碗屋久兵衛なる者あり、熱中考究して、金、赤、綠、黃、黑等各彩色の燒法を發明し、以て慶長の晩年に至る。而も窯煙の全地日吉山阿彌陀ヶ峯、なる豐公廟を蔽ふの故を以て轉地を命せられ、是に於て清水坂、及び五條坂に移る。

寛永年間、野々村清兵衛、緒方乾山等、各々一種の陶器を製出す。文化年間奥村潁川、赤繪吳須、及び交趾燒に倣ひ、陶器を製出す。維て青木巽米五條坂に住し、普く漢土の陶法に倣ひ、各種の陶磁器を製出し、また朱笠亭の陶說を刻して世に弘む。是に於て五條

坂、清水燒の製法大に進み、從て京窯の名聲世上に廣布す。遂に凡屋龜助、全嘉助、音羽茂右衛門、音羽万右衛門、音羽乾亭、龜亭平造、高橋道八、尾形周平、清水六兵衛、水越與三兵衛、眞葛長吉、清風與平等前後輩出し、各々其技能を發揮す。此時に當り、各自青華磁器の改善を計り、遂に尾形周平、及び龜亭平吉、共門人龜井熊吉等をして內國各地の製磁法を視察せしむ。全人等各地を經歴し、肥前の有田に入り、磁質、及び窯燒の事を研究し、歸京の後試みに之を製せしに、結果良好なるを得、茲に舊套を一變し、光彩煥發す。次て白陶卵殼燒の一種を發明す。之を文化初年より、弘化年間に至るの實況とす。爾后高橋、清水、幹山、永樂、龜亭、藏六、松風、七兵衛、井上、清風等進んで多種の陶磁器を製出し、博く海外に輸出す。就中井上松兵衛の如きは、尤も製陶に委しく、尙ほ內國各地の製磁を研究し、傍ら諸國の山川を跋渉し、土石釉料の原質を考察し、其良質と認むるや、之を京都に運輸して、普く全業者の共益に供す、實に有功の一人物とす。また協力の商家に至ては、吉岡吉兵衛、西田伊助、谷口長治郎、平岡利助等其他の功勞尠からす、以て今日に至る。是れ則ち平安城洛東五條坂清水燒の沿革梗概なり。

附言。清水燒初めに京燒といふ。洛の東南澁谷、若松谷、小松谷、清閑寺山、音羽山、五條坂、清水坂、眞葛、下河原、馬町、鐘鑄町、大佛、大龜谷、深草稻荷山の麓、鴨川の沿岸に至るまで、總稱して清水ヤキ製陶所といふ也。

見よ、氏が孜々本業に從事する外、また此般の考証に勉むるを。啻に其業に忠實なるのみならず、實に綽々餘裕ありと謂ふべし。尙ほ左に清風家初代、二代の略傳を附記す。

初代清風與平、梅賓と號す。加州金澤の士保田彌平の男にして、

享和十年を以て生る。文化十年京師に來り、初代高橋仁阿彌の門に入り、陶磁を研鑽し、文政年間業成り、師家の命に依り、窯を伏見桃山三夜莊に築き、專ら製陶に從事し、文政十一年京都五條坂に轉じて舗を開く。初め和漢諸陶器、及び樂燒の置物等を造り、後ち專ら青磁、青花磁、眞白磁、及び金襴彩畫の諸器を製せり。弘化四年伊木公の聘を受け、窯を備前虫明村に築き、製陶の術を其國人に傳ふ。安政四年大谷門主光明上人の召に應じ、金襴彩畫の諸器を製し、褒賞を受く。常に貫名海屋、小田海仙等の文人墨客と交遊し、合作書畫の陶器等あり。文久元年に卒す。

二代與平、五溪と號す。初代梅賓の男にして、弘化元年を以て生る。夙に父の業を受け、專ら各種の磁器を製す。又新たに白磁浮紋の諸器を作り、其他創意釉藥を出す。文久元年桂宮の命を蒙り、菊花御紋付の磁器を調進す。性畫を好み、前田暢堂の門に入り學ぶ。明治十一年病で沒し、妹夫清山晁浦をして家を嗣しむ。清山晁浦は卽ち今の三代清風與平なり。

談話數時、乃ち辭し歸る。時に降雨は止みたるも、天空はなほ黯淡たりき。

並川靖之氏

仝年十一月三十日、帝室技藝員、七寶家、並河靖之氏を三條通東北裏堀池町の邸に訪ふ。氏會ま病に臥し、面するを得ず。越て十二月八日、再び之を訪ふ。須臾にして氏出來り、さァ此方へと、導びかれて一室に入る。

室は太だ雅整にして、庭園は幽邃閑寂を極め、筧水にやあらん淙然といて鳴る、結構頗る大に、殆んど人目を驚ろかすに足る。余は座に着き、先づ其病を問ふ。氏曰く、仕事の爲に肩がつまりましたの

と、少し時候に中てられましたので、最早昨今はようムいます。と、余乃ち七寶に於る氏が經歴を請問ふ。氏曰く、人間の身の上は分らぬもので、維新前には異人の首を斬つてやろと威張つたものが、今は其異人の金を取ることを商賣にするようになりました。と、呵々一笑。

私は人さんより、早く苦勞を致しました。丁度十一の年に、この並河家へ養子に參りましたが、尤も親戚續きで。……御承知でもムりませうが、並河家は青蓮院宮さまの坊官でムいます。……實父は武州河越藩の松平大和守の家來で、……この大和守といふは、御上使を勤められまして、夫が爲め江州に五千石知行がムいました。實父は高岡九郎左衛門と申して、其代官を致して居りましたので、江州の六地藏村に屋敷がムいました。そこで私がその十一の歳に、實母が死にましたので、江州へ參り、事が濟みまして京都へ歸る途中、蹴上の井筒屋で憩んで居りますると、こゝの親父（並河）が死んで急養子だと云ふことで、……ハイ、以前から話はムいませなんだ。急に此家へ參りまして、五十日の忌服が濟み、夫より青蓮院宮さまの近侍籍に召出されました。

其頃近侍といふは、晝夜詰切りで家へ歸ることも出來ませなんだが、其後青蓮院宮さまは、幕府の不審といふので、相國寺に幽閉になりまして、私も之に附られましたから、二三年も相國寺の籔の中に居りました。……丁度近衛、鷹司、青蓮院などゝ一所に幽閉になりました時で。其後薩長が出て來て、宮さんを出しまして、やがて還俗仰せつけられ、中川宮と稱せられましたが。後に會津が守護職になつた時、宮さまはまた幕府方になつたといふので、維新後藝州侯へお預けになりまして、私も彼處の方へ附ていつて居りました。

其後宮さまは、藝州から御歸になつて、伏見宮へ御復籍になりまし

た。……何分舊主人の祿米といふは年に四百石で、私などの貰ひますのは年分に四十両、之を十二月に割りますと聊さかによりなりませむ。夫と其頃表ての長屋を貸して居りました家賃とでムいますから、中々暮しがつきません。そこで士族の商法で、先づ最初に兎を飼ふて見たり、鷄を飼ふて見たりしましたが、皆失敗りました。また團扇の骨を削るやら、洗箒をこしらへるやら、夫は色々の事をやりました。

そうして居ります中に、御所から賀陽宮（青蓮院宮の改名）へお附になりました桐村茂三郎といふが、私許へ出て來まして、此頃名古屋から京都へ製造所を設けて、七寶を製してゐるが、面白そうなから遣て見ないか。遣て見ないかと云ふて、此方は少しも知んとやから出來やすまい。いや、左程六かしくはないようだと云ふので、段々談話を聞きましたが、はア、夫はおらいよさそうな事、……やりましよ。……それで遣てぞれ程になると云ふと、平線金と銅とくッつけるので、一本七十五錢だと云ふので、夫は結構だ、幸ひ私の裏の方の座敷が明て居るから、彼處で汝と私でやろうと、二人が僅か十圓宛出し合ふて、二十圓の資本で之を遣ることとなりました。

そうしますと、無器用で針金一つ曲らんような職人ばかり、……いや一向宗の坊主の舍弟だの、ソリャ士族の古手だのなど、仕樣のない近隣の種類が集りました。そうして三ヶ月餘りボッ〳〵遣らして居ましたが、其時に製らへたものがありますから御覽に入れませう。氏は斯く云ひつゝ起て、徑六寸許なる桐の箱を持來り、やがて中より七寶製なる一箇の食籠を出し余に示せり。余手にとりて之を觀るに、蓋には鳳凰に景雲を配し、其他幾多の紋樣を嵌せるが。嵌線といひ、賦色といひ、頗る疎大敦朴にして、之を近時の精巧緻密なる製品に比すれば、實に非常の懸隔あり。されど疎大敦朴の中、自か

四百六十年前の食籠

中原

ら勃々たる創業時期の氣象を認め、殊に古色の黝然たるは、一層此器をして渾金璞玉の想あらしめ、殆んど撫摩賞嘆を禁じ得ざりき。

氏曰く、七寶を燒きますにも、窯などてムいませんから、最初は胞衣壺で燒て、其次に土器で燒て、三度目に炮烙で燒ました。アノ炮烙を上下二つ合して、其中へ入れて燒ましたので……それで其食籠が最初に出來て、嬉しうムいますから、舊主人處へ持つていつて、私もこういふものを製造する樣になりましたと、獻納を致しましたが……其後五六年經て、ふとお倉庫を見ますと、七寶食籠と書つけて、その食籠がムいまして、私許には其頃に製したものが最早一つもムいませんから、どうか此食籠は私方の紀念の爲に御下げを願ひたい。其代りお好みの品を何なり製して獻上致しますと申上げますと、そういふことなら持て歸れとのことで、其後机の前に置く手のついた水入れを製して獻上致し、これは御下げを願ひましたが、後に英

吉利の發明改良博覽會へ出品して、やがて戻つて來たのでムいます。と、說去り說來れば、此一個の古食籠こそ、實に並川家紀念の至寶なれ。

夫で其食籠の出來ましたのが、明治六年の十二月でムいますが、何處と云ふて賣先きもムいませんから、困つて居りますと。錦雲軒と云ふて、之は私より以前から七寶の製造をして居ります者が、それは外國の商館へ賣たらよかろうとの言で、傳手を以て神戸の百一番館へ見せさしますと、案外にも、之は面白いから一つ四圓に買はふ。尙はあとを四百製らへて持て來いとの注文でムいますが、此方は何せい十圓宛集め合した資本でムいますから、中々四百抔て注文に應じることが出來ませむ。ソコでどうしたがよからうと、色々相談致しましたが、一層之は有体に先方に話した方がよからうと、商館へ行つてさう申さしますと、商館でも如何にも夫は尤もだ。然し、今此方から資本を貸すといふ譯にもゆかぬが、京都の寺町通り四條上る處に、稻垣といふ漆器問屋があつて、其家は當百一番館の取引先きであるから、この七寶が五つ出來たら五つ、二十出來たら二十、五十出來たら五十といふ塩梅に、其家へ持て行けば直に金を渡さすといしよう。そうすればよいでないかと云ひますので、夫ではまるで資本がついたようなものでムいますから、如何にも結構だと、夫から精を出して製造にかゝり、五ヶ月程經ます中に、職人も追々出來るようになりました。

天外曰く、捕岡左方にある食籠こそ、並河氏初製の紀念品にして、右方にある筆筒は、其後數月經て成りしものなりと。

處が前申す桐村茂三郎は、追々七寶の製造がよくなつて來ましたから、之は並河と合同に遣るは不利益である、自分一人でやる方がよいと、分離れる氣になつてをりました處へ、丁度私が熱病で臥つて

をりましたので、夫を機會にして、貴君も御病氣で定めて工事場が喧ましかろうから、當分他へ移るとにしませうと、この近邊の植髮堂の座敷を借りて、遂に家を出てしまいまして、職工も十人程の中八人までは附て行ましたが、其中二人だけはあんまり私が氣の毒だと云ふて殘つてくれました。そこで私も、桐村が尻むけた方でムいますから、此方でも糞喰へで、病氣が癒つてから、錦雲軒に相談致しますと、どうか遣てくれんかとの言で、夫から色々藥を調合して見ました。まづ毎日舊主人の處に出勤致して居ます中に、小さな焜爐を傍に置て、色々の藥を調合致し、夫を赤銅の延板につけて、上から三文土器を載せ、靜に問暇に任して燒きましたが、なか〳〵面白い色が出來ますわい。それで夜の夜半まで起てゐて、根氣にやりましたが、一二年の後錦雲軒よりはようなつて來ました。

何分他家では、七寶を燒きますに一々定つた法ばかりでムいますが、此方は法も何も知らんのですから、赤色一つ燒くのでも、何の藥と何の藥何々といふやムいません。皆な自分が調合しては考へ出しますので、それ故赤色などは一月や二月では出來ませんなんだ。と、この勇猛なる精進刻苦あり、而して之に加ふるに歳月を以てす、宜なる哉其光彩の燦爛煥發して、名聲の遍く海の内外に響ろくや。泰西の畫家窩比、客の何等の色料を調和し、かゝる光彩を發するを得しやとの問に對し、我は吾が腦を以て調和するなりと應へしも、之と全一模範、爲すある者は皆此の如し。

夫から明治八年に、京都府勧業課の人々に勧められ、當地に開設しました博覽會へ花瓶一箇を出品致し、其時に銅牌を貰ひました。之が博覽會の味をしめた初めで、また賞牌を貰ひました初めでムいます。

その後追々上手になつて、名も出て來ました處から、横濱のストロ

ン商會から申してまいつて、出來たゝけは皆買ふといふことで、五ヶ年間の契約を致しましたが、三年位續いた處で、突然解約を申して參りました。……そうでムいます、それが明治十四年頃で。……それで何で解約するかと申しますと、どうも技術が拙なふて英國で賣れん、買手がないとのことです。然ですか、買手がないとはお耻かしいことなり、また仕方もムいませんと、解約は承知致しましたものゝ、實は大きに當惑を致しました。……どうも人間の事は節々があるものと見へまして、悪い時は悪いもので、其頃七寶の燒損ないをして、釜五六杯はさつぱり役に立たん處へもつて來て、商會からは約束を辭はられる、職工は四五十人も雇ひ入てあるは、品物は賣れぬはといふので、忽ち數千圓の借金を致しました。

然しストロン商會の會主といふが親切な男で、目下第二回博覽會が東京に開けてあつて一度見て置た方がよかろうから、自分の費用で連てッてやろうとのことで、連てッて貰ひ、内國博覽會を初めて見ましたが、いや驚ろきました。……いかにも此方は井中の蛙で、商會が買へんといふは無理もない。其時出品てをりました後藤象次郎の花瓶だの、尾張の七寶會社のものなどは中々秀でたものでムいました。

そこで一旦當地へ歸りましたが、之が七寶の終りか、今一つ花を咲かすかの思案で、氣の毒だけれども身持の悪い職工二十人許暇を出し、後は未だ二十人程をりました。そうしてものゝ十日も過ました處で、今度はストロン商會の手を離れて、もう一度東京へ踏出し、毎日々々博覽會を見にもき、またあらゆる場所から、日光も見物致し、更に東京へ歸つて篤と方針を定め、又どろ當地へ歸つて職工は殘らず暇を出し、別に小僮五人を雇ひ入れて、ぼつ〳〵初めました。

折から仝工場の畵工中原氏入來る。並河氏之を指ざして曰く、これなどは十五六の時から私が育てましたので、元來畵は習ふたことは

ないのでムいます。然し此者に描かせますれば、私の思ふたとうりに出來る。また畫を描く時に、線金の曲げ工合も考がへてありますから、線金も畫のとうり曲られる、之が私の我ものと云ふ畫師です。

或日に森寛齋さんが見へまして、これの描た下繪を見て、これは已でも描んと感心されたとがムいます。と、依て花瓶二個の下繪を出して示さる。其精緻麗妍にして、花鳥虫豸の一々眞に逼れる、實に老畫家をして激賞せしむるに足る。而して一回も師に就きたるなく、悉く自得の畫圖なりと云ふに至りては、豈また希有の天才ならずや。氏の談話は混々として盡きず、而も材料は既に余が手帳に充溢せしを以て、仝日は之にて辭し去り、越て數日再び之を訪ふ。氏また懇ごろに出迎へ、余を導びきて其工場を觀せしむ。

工場は邸内の庭續きにあり、四方は玻璃障子を嵌し、室内清爽にして、庭園の竹樹怪石悉く映徹し來り、池水また淙然として不斷の音

樂を奏す、眞に美術工藝家の工場と稱するに足る。此清爽の工場にありて、業に從ふ者二十餘人、線金を嵌するあり、蠟藥を塗るあり、色彩を和するあり、砥石にて礪ぐあり、工を施こすの順次により各席をなし、秩序頗る整々たり。氏即ち職工の工を施こすものを把り、一々説明をなす。其精細緻密にして、施工の繁雜なる、余をして感歎の餘、七寶家には成りたくないと思はしむ、呵々。

更に氏に從ひ、皮履を穿ち、幽邃紆曲なる庭園を過ぎ、枝折戸を開き、一處に至る。氏戸を開き内に入る、曰く、之が七寶を燒く窯場です。と、前なる清爽の工場に引かへ、之はまた餘り無雜作にて、尋常人家の物置小屋の如く、右邊に圓筒狀をなせる一個の小窯と、十數片の煉瓦石あり、左方に細長き水溜あるのみ。氏また煉瓦石をとつて、小窯の傍へに積み、詳さに火度の加減等を説き、水溜は火を撤する際一度に放下するの用に供するを告げ、別に小やかなる棚

上に小木祠と、一土器あるを指ざし、之が先日お談話しました、七寶を燒た胞衣壺です。と、黑煙ぱりとなりたる一土器、この處にあつては燦然たる異光を放つ。

窯場を出で、戸を閉し、再び庭園を過ぎ、奥坐敷に至り、茗を啜つて談ず。氏曰く、七寶は昔し七寶流し、また鬼國窯ともいひ、女の飾り物などゝして、支那の鬼國で燒たもので、日本でもずつと以前からムいます。桂の離宮の御禊子の引手、日光東照宮御廟などにも用ひてあり。修學院の中の御茶屋の釘隱しは、七寶の花車で、私にも摸造せとのことで摸造したことがムいます。其頃の七寶は、今とは藥料が異ふて錬藥で……また奈良正倉院の御物で、八鏡の七寶と申しますのは、絲と茶色で何ともいへん結構なものでムいますが、基金を考がへると銀らしうて、年數は凡そ千年以上でムいます。私も夫を拜見するが爲に、三度奈良へ參りました。

之にて談話一轉せり。氏曰く、私は毎朝職工と全じように、午前の八時より、十一時半まで、午後は一時より、四時半まで工場で仕事をして、夕食後五時半より夜の十時まで夜業を致します。尤もそう朝から夜まで工場に出てをりましては、職工が窮屈で歌一つ謠へんといふ勘定でムいますから、夜業だけは自分の居室で致しますので。……そういう彌々七寶を燒上る一段になりましては、決して職工の手に懸けません、皆自分一人でやるので、……之は自分が死ぬまでの規則でムいます。

余乃ち氏が禁酒につき問ふ處あり。氏曰く、そうでムいます、人さんが、汝も最早綠綬褒章も貰つたし、技藝員にもなつたりしたのだから、もう酒を飲でもよいではないかと、度々仰しやつて下さいますが、私は技藝員に成りたいと思ふて、骨折つたのぢやない、たゞ七寶について、飽までよくしたいといふ考へでムいまして、之まで

日本や諸外國の博覽會などで、金牌は十四五、其他銀牌、銅牌等は澤山貰ひましたが、此上に名譽章の二つ三つ……これは日本とも、外國ともいひませんが、之を取らない限りは、よし死で棺柩へ入るまでも、決して酒を飲まない覺悟で、假令酒を飲ましておもらい申そうと存じましても、夫までは酒に許して貰へません。と、呵々一笑。嗚呼、この精勵、この堅忍、この熱中移らざるを以てす。何の道か、何の技か、其粹然たる堂奥に入らざらんや。氏が談話を聞く者、いづれも嬰然として感れ、怵然として顧りみ、以て各其事とする所に從へば、また何ぞ頂天立地、宇宙磨滅すべからず、歳月消蝕すべからざるの人となり難からんや。

之より談は更に氏が維新前の經歴に及び、興趣津々、尅の移るを覺へず、燈を點ずるに及び、乃ち辭し歸る。

今尾景年氏

仝年十二月二十三日、畵伯今尾景年氏を寺町通五條上るの邸に訪ひ、導びかれて一室に入る。少之して氏出來る。髪やゝ蓬に、鬚やゝ疎に、顏面青白色を帶ぶ。曰く、胃病で少し弱つてをりましたが、最う大分ようムいます。と、談は忽ち繪畵に入る。

氏曰く、當時は概して疎畵を尙びますな。疎で、眞に迫つて、筆力のたつたといふのですから、大体いきにくうムいます。……ハイ、東京は一月許滯在しておりましたが、同地は御説の通り美術學校と、美術協會の二派に分れて、美術學校派は意匠さへよければ、技術は少々惡ふてもよいといふ傾きがムいますが、之でも餘り面白ふムいません。畵の第一番は意匠で、第二番が位置で、其次が技術でムいますが。技術が惡るければ、假令意匠や位置がなんぼ善くても、決していよい畵とはいへませんからな。……然し、いつも同じような花鳥

畫では、見る者が眼飽きをして來ますから、少しづゝ變て行ねばなりません。余問ふ、今日東京では日本畫と、西洋畫と混合する傾きがムいますか。氏曰く、そうでムいます。美術學校派などは全くそうで、光線や、遠近の工合がまるで寫眞のようなのがムいます。全体西洋人の畫の意匠の中にも、隨分ゐいのがムいますが、之を日本に採ますにしても、やり方はどうしても日本の風でないといきませむ。……尤も今日の日本畫は、骨格なり、其他種々改ためんならんとが多うムいます。

また東京美術學校派抔は、筆力といふことを餘り關ひませぬが、之もようムいませむ。……全体筆力のきいてゐるのは狩野で、狩野は書をかく樣に線で敎へるのでムいますから。……圓山になつては、筆を錬りこんで、細かく筆を廻して、成るべく寫生を務めるように致しますから、筆が後戻りしたり、いろ〳〵して居ります。……狩野はたい

趣きで見せるので、骨格などは餘り關ひませむ。……が、私しの思ひますには、筆がたつてさへあれば、那邊から廻してもよいので、……筆が正しいといふ方では、新規の畫が出來ませんからな。と、氏が談話の大意は、筆法は決して古人の成法を株守するに及ばず、縱横點化は一心にあり、然し筆力は沈着挺拔（卽ち利く方）ならざるべからず、罷軟鈍滯の如きは畫を爲す所以にあらずと謂ふが如し。

氏曰く、土佐はなか〳〵彩色に骨が折てゐつて、他家では出來ぬとがムいます。私の習ひました百年は、師匠なしに畫を學びました人でムいますが、彩色は土佐家へ手傳にいつて覺へました。土佐家は重にあの彩色畫で、墨畫などは滅多にムいませんが、珍らしいのは尾張の訥言といふて、……浮田一蕙の師匠、あれが土佐家で、彩色畫もなか〳〵綿密なものを描きましたが、また墨畫もあつて、筆力もしつかりして居ります。

應擧も狩野で仙齡といふた頃の畫は、筆力が利て居りますが、應擧になつてからはどうも利いてない。やつぱり寫生で骨格などに骨折つたものですから、自然そうなつたのでムいませう。英一蝶は意匠に巧みで、何でもない處に凝つてムいます。

之より談は一轉して、氏の經歴に入る。氏曰く、私は名は永歡、字は子裕、卿自樂居の別號があります。父は今尾猪助と申し、私は其五男で、幼名を猪三郎といひ、弘化二年の八月十二日に、京都衣棚通二條竪大恩寺町に生れました。家は代々三井家の悉皆屋を致して居りまして、親も上繪位は描ましたので、……それで私も幼年の時から、繪が大好でムいまして、十歳の頃でムいましたか、いろ〳〵の妖怪の畫を描て、それを處撰ばず壁に貼つけ、化物屋敷やといふて、朋輩の小兒を脅して居りましたが。其頃疫病が流行して、私方の一家も之に罹りました。そこで親共や兄が大に叱責まして、汝がこの樣な不吉の畫を室中一ぱいに張てかくから、それで家中がこんな病氣にかゝるのやと、帖つてあつた繪は殘らず引めくつて燒棄ましたが、其時叱責ました聲は、今に耳底に殘つてゐる程で、それが爲め私は妖怪の如き圖は一生描かん心得でムいます。

それで十一歳の時、初めて浮世繪師の梅川東居について繪を學び、凡そ二年ばかりやつて、段々面白くなつて來ましたが。一日東居が私を呼つけまして、汝はなか〳〵畫才があつて、後來大に見込があるから、私の樣なものについてゐずと、もつと良い師匠について、十分學ぶがよいと申してくれましたので、それで十四歳の時に、百年の門に入りました。

なれども晝の間は、悉皆の上繪などを手傳たはされて、夜分より外は畫を學ぶことは出來ませぬ。どうか疾ろふたと思ふて暇をくれいと申しましても、親が許してくれませぬ。其後あの鐵砲焚で、家が

丸燒になりましたが。其燒けたお蔭で仕事がムいませんから、朝から晩まで描て〳〵描たくつて、毎日唐紙一本を描尽しましたが、師匠の百年も大に褒てくれました。父が亡なりました後は、兄が居りまして、やつぱり家で二年許り手傳はされましたが、兄は二十八の年まで、家の仕業を手傳つてくれたら、その時は別家の資本を與ると申しましたが。私は家財や、少々の資本を貰ふよりは、一身の自由を得て、畫道を研究する方が熱望でムいましたから、遂に固く請ふて、二條通釜座に別居致しました、夫が丁度二十四歳の時でムいます。

それから二三年はようムいまして、二十六の歳には、薩藩の小松帶刀、あの人が大阪江ノ子嶋の別莊に居り、そこへ招聘されて、凡そ三月ばかり揮毫しておりましたが。帶刀は私の技術を感心してくれまして、全藩の畫家にしてやろうとのことでムいましたが、私はそれが爲め一身を縛られて、畫道を研究する障礙になつてはと存じまして、遂にこれは辭はつてしまいました。

其後南畫の時節となりまして、私などは思ふように描してくれませむ。師匠の百年なども、其頃は南畫をやりましたが、どうも私は好きませんので。そりや南畫は用筆も閑雅なり、氣韵も高超はムいますが、あの如く眞形に遠いのは、繪畫に於て好む處でムいませんから、どうあつても描く氣になりませず、止を得ず、活計の爲に西村（總左衞門氏）のものやら、色々のものを描て暮しをたてましたが。明治十五年頃から、寫生家の畫がまた流行つてまいりまして、今日では少しはもてはやされるようになりました。

氏はいと朴實に其經歴を語り、且曰く、畫はどうしても寫生を基礎としなければいきませむ。それ故常に門人を戒しめて、寫生本と矢立は決して傍を離さぬようにせいと申して居りまして、今でも十日

と一日は寫生日と定め、此日は特に寫生をさすことにして居ります。

と、之より更に餘談に移り、一時半許乃ち辭し歸る。

附記

景年氏の寡默なる、敢て多く語らざるを以て、余は門人梅村景山、上田方秋、其他諸氏につき氏の性行を質し、左の數項を得たり。

曰く、

師は初め、吳春、景文等の筆意を學び、中頃は一變して唐宋諸名家、殊に李廸、錢舜舉などを慕ひ、近くは細緻巧妙なる花鳥に於て、沈南蘋、梅逸、春琴等の面影を認め、尙ほ進で唐宋諸名家の畫体を博綜して、山水、人物、其他に於て着想豐富、筆力勁健に至つたように思ひます。

それで師匠が一度筆を把つて縑素に對しますると、其心神は全く畫中に打こんで、他の事は何にも知りませず。人が來て呼かけましても、一向氣がつきません。また屏風など描て、筆の繼目や何かになりますと、筆や刷毛もポトンと拋り出してしもうて、今度探すのが大騒ぎです。

それ位で、一つの畫を作りますにも、なか〳〵苟くもするといふことはムいません。前年或人が一双の屏風を持て來て、極彩色の孔雀の圖を囑まれましたが。師匠はそれにかゝつて、餘程多くの日子を費やし、最早八分通り仕上りました處で、不圖毛描が氣に入らんと申し、折角幾多の苦辛で着色しました地塗の、群青や金泥等を惜氣もなく洗ひ落し、再び筆をとつて描なほし、漸やく自分の心に適つて、初めて莞爾と笑ひました。そういふ風で、書損は幾枚も致しまして、多いのは一の畫について、三枚より五枚までもやります。

また師匠は天性篤實で、大言もて世を欺き、名を衒ふことなどは深く

嫌ひます。中年以後、胃病で病床に呻吟勝で、大抵は蟄居して人に接しません。それ故或は蹙やとか、嘔やとか嘲る者もムいますが、師匠は一向頓着しません。私が一心は全く畫道に投じてあるので、其他は煩らはしくて堪らんと申して居ります。

何分畫を描くより外に、殆んど樂のない人で、朝も早ふムいますし、氣分さへよければ終日描て、夜になるとまた小絲などに描て居ります。何かないに問さへあると、直ぐ筆が持たくなるので、それで病中などで、醫師から畫を描くのを止られますと、其苦痛が病苦より烈しふムいまして、時に病を冒して筆を把りますと、忽ち苦痛を忘れて、心神が壯健の時のようになります。それで師匠は笑つて、私が畫に對つて墨汁を啜るのは、口に苦い良藥を飲より勝つておると申します。

それでまた美術工藝には、なか〳〵力を尽しまして、殊に天禀の畫才で、巧みに工技に應用し、其配色の妙絶なるのは、他の及ばぬ處でムいます。

嗜好とも申しまするは、盆栽と小狗で、小狗は太く愛して、いろ〳〵飼養の勞をとりますし、盆栽もまた巧みに培養しまして、風韵に富だものを蒐集て置ます。また氣が鬱します時には、屋根へ上つて紙鳶を揚たり、また坐敷の隅で輪投などをしたり、まるで兒戯に均しきをして運動をしております。と、

この般の談話、また氏が性行を描出するに於て大に價値あり、故にこゝに附記す。

鈴木松年氏

仝年三月三日、畫伯鈴木松年氏を東洞院錦上るの邸に訪ふ。會ま氏は田能村直入翁が觀梅の宴に趣むかんとする際なるを以て、晤談少

時、再訪を約して歸り、仝月八日夜、再び之を訪ひ、導びかれて其畫室に入る。

氏今年四十八歳、頭髪は二三分に刈り、眉濃く、眼大に、両頰微紅を帶び、崛强の氣は顏面に溢れて、音吐頗る力あり、又尋常畫家の風貌にあらず。氏は開口一番、先づ全國の畫家を罵倒し、殊に京都畫家の意氣精神毫も見るべきなく、只屑々技巧の末に趨りて、大雅、蕭白、若冲等の再び出ざるを歎じ、畫家は須らく書を讀み、殊に內典を窺ひ、以て其精神を高尙にすべきを論ず。其大意を傾聆せば、固より首肯すべきありと雖も、而も氏が語を追て之を檢せば、頗る矯激躁雜にして、醇正冲和の見なく、其所謂精神なるものも、概して意氣の奔放を指す如く、美術の極致に於て未だ契當せざるあるが如し。されど明媚温雅の平安山水中、この崛强奇拗の一畫家を着く、また明治の一異彩と謂はざるを得ず。

氏が精神論は暫らく措く。而して氏の經歷、並に古畫家の逸事を談ずるに至ては、精采奕々、興味津々、殆んど尅の移るを覺へず。氏は其崛强なる顏面に、微笑を湛へて曰く、私の親父（百年）は固と畫工でないので、老人（祖父）は圖書と云ふて、土御門家の天文博士であつたのです。處が親父は十歳位の時から繪畫が器用で、天文家のことであるから、地球の圖とか、種々の圖を老人が寫させるに中々旨い。また自分も好であつて、自然々々に上達して、師匠なしに遂に畫家になつたのです。夫もへ鈴木派の畫は、誰にもよらぬのが鈴木派で、百年の弟子にも、百年を學んでゐるものもあれば、又他の畫風になつてゐるもあり、其樣なことは一向關はぬが、其捨育ちより花が咲て、一種の名を揚てゐる者がある。

このように、自分が固よりの畫工でないから、畫工で以て家を續がす考へもなかつたので、……處が私が四歳の時に、口に一杯クサが出

來て、物いふとは出來す、只泣くのみであつたが。何か欲しいものがあると、筆を以て半紙に其ものを描た處から、成程妙なものや、親父が畫を描くから、此子も畫心があると見へる、こりや一層他のものにするよりは、畫工にしたはうがよかろうといふので、祖父が殊に愛してくれまして、親父も遂に畫工とすることに致しました。それ程ですから、何につけても畫が好で、其傍らには軍談を好んで、聞て來ては自らやりましたが、他の小供のように紙鳶なぞ上したことは一寸もない。へい、子供の時は百太郎と云ひました。

そこで幼少の時から、兎角人と喧嘩することが好で、畫のことについては、親とでも反對して云ふことを聞かぬ、妙な處に意地があつて、右せよといへば左する。なをして貰ふことが大嫌ひで、成るべくなをして貰ひとみない。それで知てゐるものが、百僊さんは、……其頃は私が百僊といふたので、……百僊さんは、他の事は親父さんの言葉に背かはらんが、畫にかけては妙に親不孝だと云ふた位です。けれども世間ではそう思はず、私が段々描るようになつて來るのを見て、どうもあの年であれ程描るわけがない、大概七分は百年さんがなをすのやろと云ふから、腹が立て堪らない。よし、夫なら自ら畫く腕を見せていやろう。昔し大雅堂は、祇園の繪馬堂の下で一日千枚の富士を描いた。また長澤蘆雪も、一日千枚描をしたが、其實蘆雪のは纔かに百枚描たばかりで、夫を千枚と云ふたのだ。けれども已は正眞に、一日千枚描ていやろうと力み出したが、丁度私が二十二歳の時で。其頃は畫の傍らに諸藩の士なぞにつきあふて、長い刀を佩して、國事を論じなぞしたり、未だしつかり畫工になろうとも定らず、何か他の事で出世しようかとも迷ふてゐたことであるから、若し此千枚描が出來たら畫工をせうし、出來なんだら止て他のことをしようと決心しました。

そこで此事を出入の者などに談話すると、夫はお止めなさい、口でこそ千枚やが、なか〳〵一日にそう描るものでない。仰山に人を集めて置て、若し描なんだ時には外聞が悪いから、絶てお止めなさいと、親父の百年にも止さすように云ふたが。親父は百圓は手に合はぬ横着者で、止ても止るまいし、一層遣して見ましよと云ふので、そういふとならと、出入との者も世話するとになつた。

處が、その千枚描をするには、席料や其他諸雜費を合して、さつと百圓程になるので、來會者より會費として、一人につき一朱か二朱づゝ取るとにせうと、世話方が相談をしたが。私は錢とつてなら遣る氣がない、どうか無料でしてくれ、百圓位の金は今に已れが稼ぎ出してどうともするからといふので、そりや面白い、そういふ御氣象ならと、世話方は一層氣が乘つて、奔走してくれました。

そこで祇園の隨身門と、清水の山門と二ヶ所に、大畫仙紙五枚程糊合して、夫に三月何日、丸山正阿彌樓に於て、鈴木百圓一日千枚描をなす云々、と大きく書出して、両方とも二個づゝ人をつけて置た、この隨身門の方は、四條の橋から見へた位で。當日になると正阿彌樓の大座敷に悉く翠簾をかけて、金屏風を立まはし、私は黑の熨斗目に、白の襲着に、白羽二重で腕貫をし、社祢を後ろへ刎ねて、白羽二重の玉襷をかけた。左右には今尾景年、久保田米僊、外二人、合せて四人が控へて、來會者に望みの圖を聞糺す。大硯三個には、七人の弟子が代り〳〵墨を磨る。また机の傍には、弟子が双方二三人づゝ控へて、一枚の畫が出來れば、片傍でシユーッと引くと全時に、片傍から代りの紙を繰出す。醫師は當日祝ひとして佛光寺の門主からさし向られたのが二人、緞子の被布を着て、傍に附き添ひ、何枚目には何を服す、何枚目には何を服すと、藥餌を調合する。無論物食ふとも出來ず、小便に立つとも出來ぬのであるが、藥餌の爲に

何ともない。また出席した世話方や門人等は、凡そ百五六十名も有て、押寄た來會者は實に非常である。繪は彩色畫であるが、固より密なものは描てゐられんから、鐘馗といへば、冠と劔をさつと描く。道成寺、よしと鐘の底を一抹はいて、之に紅で花片をちよッ〳〵と點ずる、向ふは山の如き人で、いやもう眼もくらむようだ。夫で朝の六時から初めて、日の下りが今の午後四時といふ頃、總世話方の頭取紅染堂といふのが來て、私の耳に細語た。先生しつかりせんと いきませんせ、未だ半分も出來てやしまへんがなと云ふたから驚ろいて、今時分に半分も出來んではこりや大變たと、一層颯々と書ないつたが。なんの、之は紅染堂が私を勵ます計略で、其時實は八百枚を越してゐたのであるから、間もなく千枚描終つて、まだ好みに從つて千枚の外へ出た。まづ之でお目出度濟ましたと云はれた時に、ガタンと疲勞が一時に出て、後ろへ倒て踏でゐた社祢が、皆ピリ〳〵と破れてしもうた、ひどいものです。

夫で會費も無料といふとであつたが、當日第一番に七條の相場師が五両包で來る。三両のもある。一分もある。二朱、一朱もある。祇園の幇間までお目出度からと何程か出せば、藝妓も客に貰ふたポチを出すといふ塩梅で、後で世話方が勘定したら、凡そ二百圓程集つたそうだ。と、聽來れば鋪設濶大、精彩奕々、恰かも水滸の大文章を讀むが如く、一箇崛强奇拗眼中人なきの畫家鈴木百僊が、當年の面目精神飛舞活躍し、其少壯時代に於て、早く一時を驚動せしめし絶大の氣魄を見るに足る。豈に畫家の一快談と謂はざるべけんや。

氏は茗を啜り、語をついで曰く、席上描については種々面白い談話がある。大佛妙法院の宮さんは繪畫がお好で、吳春が召れて教授を申上てゐたが、時々畫工を集めては揮毫のお慰みがある。或時の會に、芦雪は餅が好であるから、御臺所から餅綱を提て來て、夫にべ

ついたり墨をつけて紙に捺し、これに鼠がとられた處を描た。すると景文はまた仝じ印痕に萬年青と鉢を描て、豐彦であつたか、山雀を描た。呉春は粋な人で、直に筆を援て、久松が藏の窓からのぞひてゐる處を描た、アハ、、、。

又ある時に、席上の會があつた。其頃岸駒は非常の勢力であつたが、宮さんはどういふものか岸駒がお嫌ひである。然し、一度呼で見るもよかろうとのことで、お召になつたが。他の畫工は羽織袴で、呉春は夫もなしに常に被布を着てゐる。處が岸駒は大層嚴格な人で、越前介を受領してゐるから、廟社祢に黒の紋付で、弟子は股だちをとつて、青い文庫に紫の紐のついたのを持て供をして來る。先方に着くなり岸駒は大玄關から提刀をしてずッと上つたが、身体は小さい男であるけれど、其勢力に恐れて他の畫工は皆小さくなつて避てゐた。

さて席上描となり、岸駒は岸駒だけに面白く描て退たが、やがて次の間で御膳が出る。呉春は宮さんの教授を申上てゐるから、一揖もせずに平氣で一番の席についた。他の畫工は二番の席を岸駒に殘して、夫々坐についた。處が岸駒は呉春が一番の席に着たから、ムッと腹を立てゝ、次の室へ雑掌を呼で云ふには、只今見受ますれば、呉春が一番の席についておりまするが。私は不肖ながら越前介を受領してをるものであるから、官位に對しても無官の呉春の下に着くとは出來ませむ。まかし私から申せば角が立ちますから、どうか貴殿の方から呉春に宜しく申して下さるようにと云ふたが、岸駒の樣子が變だから、他の畫工は顔見合して、何となく坐が冷却けて來た。そうすると此事が宮さんのお耳に入つて、大きに御立腹なされて、此場所を何と心得てをる。こゝは位官爭ひする場所でない、繪畫を描て互ひに風雅の交はりをしてをるのである。若し位官爭ひするな

らば、岸駒輩が余と仝席が叶ふと思ふか。吳春は余の師匠で、余の眼からは吳春ほど能く畫を描く者は天下にない、畢竟吳春は天爵がある。夫に何ぞや越前介を受領してをるの何のと、憎くい奴だ。そふいふことを申す奴だから余が嫌ひなので、最早汚らはしい、眼障りだからとつと〻追歸せと、岸駒の描たものは皆御拆破りになつた。

そこで雜掌も仕方がない、宮さまが御立腹でムるから、どうか只今から御引退下さいと云ふので、流石の岸駒も返す辭がなく、悄々として引下つたが、宮さんはなか〳〵御立腹が止まぬ、實に無禮な奴だと怒つておいでになると。暫時して取次の者が名刺を出して、此者が只今是非お目通りが願ひたいと參つて居りますが、如何計らひませうとのことで、宮さんが御覽になると、畫工岸駒……なんだ、此奴は今追返させた奴ぢやないか、夫にまた名刺を出してお目通りを願ひたいと、實におかしな奴だ。兎に角逢ふて口上を聞て見よと仰せらるゝので、雜掌が出て見ると今度は羽織袴で、草履を穿て、私は畫工岸駒と申しますが、今日は此方の御殿に於て席上畫の御催ふしがムりますそうで、若しその御席に列なりませんでは、畫工の一分が相立ちませねば、何卒席末にでも御列ね下し置るゝ樣願はしう存ずると、極めて慇懃にいふので、雜掌も呆れて其通り申上ると、宮さんは掌を抵て感心遊ばした。流石は天下に名を揚る畫工はぞあつて、いかにも其胆力が面白い。許す、此方へ通せとのことで、俄かに御機嫌がなはつたが。岸駒は他の畫工が此方へと上坐にすゝめても、いやたゞ席末に列すれば夫で過分でと、一番下に坐つて、へい〳〵云ふて歸つたと、夫から宮さんはひどく岸駒のものを御好になつた。

氏は岸駒の逸事につき、倘は數條を語り、實に岸駒は智仁勇兼備へた人で、其精神の映徹る處で繪畫が尊とい。夫だから私は、應舉よ

りは岸駒の方を尊ぶ。と、語に曰く、惺々識惺々。好漢識好漢。と、氏は岸駒に於て其崛强なる處相似たり、其倨傲なる處相似たり、其意表に出る處相似たり、其氣魄の濶大なる處相似たり、たゞ岸駒が能く剛に、能く柔なる機變滑脫と、其畫の豪宕磊落一世を凌轢するあるに至つては、未だ今年四十八歳の松年氏に向つて、俄かに之を望むべからざるなり。

氏は談話一轉して、故幸野梅嶺氏との交情を語て曰く、私は梅嶺とは極く交情が惡ふて、凡そ十七八年もの言はなんだ。處が明治何年であつたか、未だ三條公が在世の時で、圓山の左阿彌に今の伊藤さんや、他の貴顯方が、一日席上畫が見たいとのことで、直入、寛齋、香谷、百年、玉泉、梅嶺に、それに私とが行つた。其席で梅嶺が畫を描いて、筆洗から筆を持つて來しなに、どうしたとか筆の頭が拔て、ハッと思ふと、顏を眞赤にして當惑したが、私が見かねて、梅嶺の袖の下から筆をしもつと出したので、梅嶺は誰が出したとも知らずに、其筆で畫を描いてしもうた。それはそのまゝで濟だ處が、二三日して梅嶺がひよろッと私の家へやつて來て、どうか松年さんにお目にかゝりたいといふので、可笑しなことだ。日頃交情の惡い梅嶺が何しに來たか、まア兎も角逢て見ようと、上へあげて面會すると、梅嶺がいふには、時に松年さん、汝さんと私とは、之まで交情が惡かつたが、考へて見れば全く私が惡かつた。それで謝罪り旁々今日は禮に來たといふは外でもないが、此間左阿彌の席上畫の時に、私の筆の頭が拔けて當惑した處を、汝さんがそつと筆を入てくれたのやそうで、其時には知らなんだが、後から外の者に聞て實に感心した。どうか之を機會に之までのことは水に流して、今後は交情よくして下さらんかと云ふから。私がいや、そりやおきまへう……そりやおきまへうて、何でやと云ふから。成程、汝の筆の頭が落たから、

私が筆を借してあげたのは畫道の相見互ひやけれども、汝は私の氣に入らんのやから、情交を好うするとはどうでもいやだと云ふと。梅嶺が、そんなら私のどういふ處が氣に入んといふから、いや顔つきも氣に入らねば、氣性も氣に入らず、繪畫も氣に入らん、夫だから交情よくするとはお斷りだと乾ばり云ふたので、今度は梅嶺も腹を立て、そんなら改めて交情を惡くせうと、挨拶もせずに歸つた。

其後梅嶺の死ぬ前であつた。一日竹堂さんが、松年さん、今日は珍らしいものを御馳走するから御出といふので、竹堂さんの家へ行くと、外に寛齋と鐵齋とおられて、自分の外にもう一つ御膳がある。はて誰が來るのか知らんと思ふてゐると、やがてヤア、と云ふて梅嶺が入つて來た。そこで竹堂さんの云ふには、なア松年さん、どういふ因緣か知らんが、今京都に松年、竹堂、梅嶺と、全じ時代に松竹梅が揃ふたのは實に珍らしいに、その松竹梅が交情が惡ふてはいかんやないか。どうか竹の私が中裁するから、松も梅も交情よくなつて貰ひたいと云はれるので。私はいや別に交情が惡いといふともないが、何だか意氣が合はんので……それに私が思ふと、交情が惡い方が却つて競爭になつてよい。誠信も信玄が亡なつては、面白い戰鬪が出來んようなもので、また人こそ互に交情が惡ふても、繪畫は勝手に交情が好くなる。卽ち梅嶺さんのと、私のとを三幅對にして一處に懸ようと、そりや關はぬ。繪畫は他人が交情ようしてくれるから、人間は交情よくなるに及ばん。私はどふいふものか、何處までも梅嶺さんは嫌ひやのやからといふと。寛齋が傍からそれもよいく と云ふので、到頭死ぬまで口をきかなかつたが。それで梅嶺の死だ時は、一番に私が吊みにもきました。

余問ふて曰く、先生は繪畫をお描きになる前に、如何に思ひをお凝らしになりますか。氏曰く、夫は隨分考がへも致しまするが、全体

畫家の縑や紙に向ふのは、武士が戰場に臨んだようなもので、百敗百勝は兵家の常であるから、一枚も書損ないてしたことはありませひ、書損なふても其儘にやつてしもう。金屏風に描くにも、半紙一枚に描くにも仝じことで、私はかけがへの——二枚の精神といふものは持たぬ。

私の親百年は、丁寧に下描をしてからでないと畫は描かなんだ。卽ち先づ陣取りを定めて戰鬪をする方で。私はまた燒炭をあてるの、下描きをするのといふことはない、卒然之に臨んで短兵急にやつゝける。卽ち陣取りは定めずに臨機に戰鬪をする方で、時には幾張の縑面を一時に並べさせて、颯と樹木を描けば、次のものにしもつと水の流れを描くといふ塩梅で、それ故に半分描て興の來るまで棄てある縑面が澤山あるのです。と、然り、余もまた氏の畫室に幾面の素縑二三分の墨痕を負ふて排列せられたるを見て、心竊かに之を怪しみたりき。今氏の談話を聞て之を解すると仝時に、竊かに其靈心放膽の未だ畫諦の第一義に參透せざるべきを思ひ、實に痛惜の情に堪へざりき。

異日三たび氏を訪ふ。氏曰く、近來は繪畫を描くに餘程大事を踏むようになつて、一枚の端冊を描くにもなか〳〵骨を折ります。まだ〳〵之から變るのです。と、余賀して曰く、之ある哉〳〵、先生の畫境夫れ之より一變せんか。凡そ何の學何の技に係はらず、細心刻苦ならずして能く其上乘に達する者なし。若し其心を用ゐるの苦しめる、技を錬るの久しき、一旦天機豁然として、宇宙万象悉く心上に朗徹し、技、心と應じ、筆、腕と忘るに至つては、洒然、淡然、悠々然、閒々然、白雲岫を出て舒卷自在、風水相逢ふて奇文相壓す。こゝに至つては、卒然落筆するもよし、劈空一掃するもよし、所謂陣取りを定めず戰鬪するまた惡しとなさず、而かも其意思は毫然別

ならざるべからず。今や先生其麗心を收め、其放膽を錬り、當に第一義に參透せんとし、今日は恰も其轉機に屬す、余は先生の畫境之より一變せんを知る。と、

氏の畫室一龕を安んず。余其何の佛を禮するを問ふ。氏曰く、之は私の守護本尊です。と、龕を開けば、何ぞ圖らん古色黝然たる魔魔大王ならんとは。氏曰く魔魔は未來に於る罪人の判官たるばかりでない、現世に於てもまた判官である。私は一つの畫を描くにも、惡畫の人を害する樣なものを描かぬよう、即ちこの判官の面前に於て筆をとる心地です。と、其奇語人を駭ろかす概ぬ此の如し。之より談は佛畫に入る。

氏曰く、私は人物畫が好で、人物畫の中でも殊に佛畫が好です。夫で一生の間に五百幅の羅漢圖を世間に殘したいといふ心願がある。處が前年金閣寺の住職の紹介で、當時相國寺の中の瑞春庵に住持してゐる大橋海應といふ坊さんに逢ひました。この人は獨園和尚などの相弟子でなか〳〵よい人であるから、追々往來して懇意になり、其瑞春庵へも遊びにいつたが、固は由緒のある庵だが、檀家といふものは纔か一二軒許りよりなふて、從つて堂宇も荒はてゝある。そこで私が氣の毒に思ふて、夫では私が一生の間に書殘そうと思ふ五百幅の羅漢中、百幅だけを寄附して上るから、夫を基金として堂宇を再建なさるがよい。尤も其百幅も寺の中に藏つておくのでなふて、それを俗家へ讓つて基金とするといふ仕かけで……そこで坊さんも喜こんで他で談話をすると、室町の或豪家の隱居や、檀家の人抔が、松年先生がそれほど寄附して下さることなれば、我々も默つてゐられないからと、その隱居が二三百圓寄附すれば、他からそれ佛壇、それ何と追々澤山寄附が集まつて來ました。

そこで私の寄附の百幅の畫は、一端瑞春庵へやつて、全庵から更に

一幅十五圓宛で望みの人に讓ることとしたが、最早滿員になつて百幅の價千五百圓といふものは、其室町の豪家で保管して、其他の寄附金を併せ、堂宇の再建をしましたが、來月の二十日が其棟上で、坊さんも私しへの報恩の爲といふて、毎月私の家へ般若心經を誦みに來る、又全庵中に私の筆塚を築くことゝ成ました。

その百幅の羅漢の中、三十幅程は描上つて、獨園和尚が一々贊をされましたが、和尚が入寂の後は、今の東福寺管長濟門敬冲師が、代つて贊をさるゝことになりました。と、嗚呼氏が稜々の奇骨、拔俗の俠氣、余輩は實に贊揚一番を禁ずる能はず。而かも氏は曰く、これは私が死後の圖をなすので、あながち瑞春庵の爲のみでない。と、一語赤裸々にして、松年氏の面目鬚眉此中に躍如たり。よし、死後の圖なると、瑞春庵の爲なるとを問ふを休よ、須らく勇猛精進、堅固不退、以て五百の阿羅漢を天地間に放出し去れ。——其眉毛を剔起せしめて、其怪眼を圓睜せしめて。——古德曰く、枯木龍吟すと。識らず枯木何によつて龍吟する。頭を上れば天邊明月圓なり。喝。

原在泉氏

仝年五月五日、畫伯原在泉氏を中立賓室町西へ入るの邸に訪ひ、導びかれて其畫樓に上り、先づ初對面の挨拶をなし、次で談話は氏が御苑內開設の全國繪畫共進會に出陳せし飾馬の圖に入る。

氏曰く、京都の畫も一定の山水とか、花鳥とかで、有職故實の畫が尠ない樣に思ひますから描て見ましたので、あの飾馬の圖の前にあるのが寮の馬で、移し鞍で、眞中が和鞍で、後ろのが大和鞍です。寮の馬といふのは、仲國が寮の御馬賜はりてとある、所謂御廐の馬で、大和鞍のは六位以下では乘れぬ、殿上人でなければいかぬのです。實はもう二段ほど描分けるつもりでムいましたが、出陳の時日

が迫りました爲め、三頭でしまいましたので。……また鞍蔽といふものがあつて、乘人が下りると被けておくものでムいますが。被てかいては鞍が見へませぬから、舍人の肩にかけてあるのでムいます。

全体私の家は、專ら宮中の御用を承たまはつておりましたので、自づと有職の畫が多ふムいますが、夫でも何時變つた仰せが下るか知れませぬから、山水でも、花鳥でも、また支那風の畫でも、何でも全じ位にやらねばなりませぬ。私は十歳の時から畫筆を持ましたが、手本といへば僅かに美濃紙に十四五枚畫てもらひましたばかりで、其外は年中親父の畫の手傳ひと、御所の使を致し、御所へはべつたりはいりこんで居ました。丁度私が十三歳の時で、宮中で在照の息子がいつでも來ておるが、あれに一度畫を描せて見たらといふような御詮議があつたと見へまして、其頃宮中の御賄ひ頭してゐた江戸役人の、中村雅太郎といふて、大層威勢のあつた人でムいますが。

其人が私方へ參りまして、其方の息子に、今日畫を描せて差出すようにとのことでムいましたが。まさか今日といふわけにも參りませぬから、明朝までとお問を願ふて、絹地の横ものに緑青などかけて、秋草の圖を描てさし出しました。尤も圖は親父にこしらへてもらうて、私が筆をとつたのでムいます。夫から引續ひて、美濃地の扇面などを御用の止み間なく、維新前の騷動の時も、御奥では更に御關ひなくちつとも變つたことがムりませんで、私も下僕に端冊匣など持せて、常に御出入を致しました。その間には例の親父の畫の手傳をして、いや砂子だの、泥引などゝ、專ら實物で、御用を勤めながら稽古を致しまして、大きに幸福でムいました。

其後、先日御崩御になりました皇太后さまの、大宮御所に御出になります時も、べつたり御用を承たまはつて居ましたが。丁度私が二十三歳の時に親父が亡なりまして、翌年初めて東京へ上りました際

にも、宮内省へ呼出されて、屏風や、三幅對など種々の御用を仰せつけられ、凡そ八十日間程逗留して此地へ歸りました、其後も絶へず御用を承たまはつて居るのでムいます。

余問ふ、先生は一日凡そ何時間程、畫におかゝりになりますか。氏曰く、夫は終日で、お客のわつた時は別でムいますが、家に居たら眞にやりづめで、夜も遲くまでやることもありますれば、また午前の三時頃から起て描くこともムいます。亡父などは朝起て袴を着てから翌朝の鷄の鳴ふまで常にやつて居りましたので、其傍に平生附ておりましたのと、また宮中の御用とあれば、病氣の時でも何でも勤めねばなりませんから、夫等の事で自然に習慣になつたものと見へます。全体少しは運動すればよいのでムいますが、夫も出不性なり、また餘裕の樂しみといふものも、今分の處では何にもムいませむ、之より談は一轉して彩色に入る。氏曰く、群靛でも絲青でも、其性質とねうちのあるだけ、光澤でも何でも出ればようムいますが、夫がどうも至難かしいので。大和繪などでは、此彩色が一番先に立ちます。土佐は土佐だけ、どうも巧ふムいますが、四條派はてんと整のふて居りませむ。近頃はまた外の畫具を種々混合て、妙な色を出すとも往々見ておりますが、之はあんまりよふないとと思ひます。

また奇麗に、いかにも手際に、染たように塗つてあるのもムいますが、夫では自づと品格が卑しくなります。やはり、少しは筆班の見へる位がよいようでムいます。

余問ふ、東京出陳の繪畫の中には、東西繪畫の折衷を企だて未だ熟せざる爲め、隨分面白からず思はるゝものもムいますが、彼の趨勢で二十年三十年と經過して、氣運か熟して參れば、自然に融和して一變するでムいませうか。氏曰く、そうでムいます。應擧も狩野より出て、圓山に變へかけた際には、大概あんなものでムいませう。

と、一語斷下。人或は氏の畫風を觀て、其守舊家なるやを疑ふ。而して氏の眼光は、却つて革新の前途に向つて、其光明を認めつゝある也。

されど、氏はまた舊派の典型の飽まで保存すべきを思ふ。曰く、東京は流石大都會で、狩野派もあれば、南畫もあり、四條風もあるといふ趣でムいますが。京都は一つのような風に、凝固まつてしまいましたは殘念でムいます。どうか狩野や土佐は、歴乾として保存したいもので……また有職故實の畫なども、どうか絶へないように致したいものでムいます。と、其識見公平穩妥、誰か首肯せざるものからむ。

氏また自己の畫を描く法を述て曰く、草稿は無論起さねばなりません。草稿が十日かゝれば、眞正に描くのが十日、まづ半分々々で。飾馬の圖などで、ざつと十七八日かゝりました。そうして一旦描かけましては、決して遣りなをすことは致しません。遣りなをすと惑ふもので、……綺麗にはなりますが、最初の勢が脫てしまいますから。

な。と、古人また之を論ずる詳かなり。曰く、機神所到。無事遲廻顧慮。以其出於天也。其不可遏也。如弩箭之離弦。其不可測也。如震雷之出地。前乎此者。杳不知其所自起。後乎此者。杳不知其所由終。不前不後。恰値其時。興與機會。則可遇而不可求之傑作成焉。復欲爲之。雖倍力追尋。愈求愈遠。夫豈知後此之追尋。已屬人爲。而非天也。と、蹤然神來の候、由來按排施設と相容れざるもの。氏や飽まで此消息を了せる者と謂ふべし。

氏今年四十九歳。性情和平ましして、飾らず亢らず、其容姿や温々如たり、其語るや諄々如たり、蓋し畫家中の君子人といふべし。談話一時半許卽ち辭し歸る

谷口藹山翁

仝年五月十二日、南宗の大家谷口藹山翁を、護王神社の西手なる邸に訪ひ、刺を通じ謁を乞ふ。命を將ふ婦人奥に入り、少時して出來り、曰く、どうも此方では、今まで御目に懸つたことがないように申しておられますが。余曰く、そうです。今まで御目に懸つたことはムいませんが、若し御閑なれば、御面會が願ひたいので。婦人再び奥に入り、やゝあつて出來る。曰く、御用がムいますなれば、私に仰しやつて下さいましては。實は少し御病氣で、臥つてお出なさいますので。余曰く、御取次では間に合ん用でムいますから、夫では日を改めて伺ふことに致しませう。と、時に一青年蹶然として出來り、余に問ふて曰く、あの御用で御出になつたのでムいますか。余曰く、そうです、名家歴訪錄のことにつき、御談話を伺がひたいと存じまして。青年曰く、いや夫なら御目にかゝらないこともないでムいませう。一寸そう云つて見まするから。と、身を翻へして内に入りしが。少時して、どうぞお上りなさいましとのことに、玄關より右手なる椽端を傳ひて、其畫室に入る。

畫室は六疊許り、左方には翁の新たに揮毫せし枠張の畫一二面を立かけあり。翁は臥床の上に起なをりて、莞爾に余を迎へ、これはようお尋ね下さいました、然しもう老人のことで、臥たり起たりしてゐて甚だ失禮で、……丁度此方も東京から尋ねて見へたので。と、青年を顧りみれば。青年は改めて刺を余に通せしが、之ぞ鴻雪爪翁の通家青年にて、中央新聞記者なる星野復雄氏ならんとは。翁は雪爪翁と舊あり、而して雪爪翁は余が鄕里彦根なる淸涼禪寺に住持せられしなれば、此處一段の因緣なしとせず、相見て殆んど舊知の如き感ありき。

余卽ち翁に問ふに、其經歴、または繪畫につきての談話を示さんと

を以てす。翁耳を傾むけ、やゝ解せざるものゝ如し。星野氏余が袖をひき曰く、先生も御老年ですから、今少し聲を大きく。余は頷て膝を進め、更に聲を高めて前請を申ぶ。翁曰く、いや時々何か談話をせいと言はれますが、もう老人のことで、順序をたてゝお談話するようなことも出來ず。また經歴といふた處が、それは十八の年に江戸へ出てから、徳川の最も盛んな時も見、また大阪へ來れは大塩が騒動の後やら、長崎へ行けは黒船が出て來たと騒いて居る、それから引續いて維新前の騒動などで、隨分面白いこともあれば、危ない目にも逢ましたが、前のことなど話しすると、さし障りが出來てきたりするから、それでもう談話せぬことに定てゐますぢや。たゞ種々のことがあつたが、首尾よう逃れて、今日まで生殘つてゐるといふばかりで、どうかこんな老翁であつたことでも書て置て下さい。と、八十二歳の老翁、毫も世に求むる處なく、機識銷し盡て、淡々たり、洒々たり、而かも容顔紅色を帶て、鬚眉雪の如く、無邪氣に微笑を含みて、またよく大笑す。余唯々として茗を啜り、徐ろに雑談をなす。

而して翁もまた興懐の開きしにや、雅談津々、漸く佳境に入る。

翁曰く、私の生國は越中の富山で、小兒の時から筆もつて天狗面などを描て、繪畫は好であつて、呉竹砂といふものゝ弟子杯に就て學びました。十八の時に江戸へ出て、あの山高(信離氏)さんの叔父さんに當る、酒井右近といふ人の家で世話になつて、其家から文晁の處へ弟子入しましたとや。其時分文晁といふとおらい勢力のあつたもので、五十の日が畫の稽古日であつたが、其日になると、文晁が座敷の眞中で畫を描て、弟子が百人も二百人も周圍を取卷て見てゐる。穿足兒などは直き替られるから、雪駄を懐中へ入れて座敷に上り、そうして延上て見てゐる。いや何侯の御隱居が見へた、そうか其毛氏でも敷てあけいと、まるでへたな畫畫會見たいなもので、隨分ば

つとしたものであつた。……いや、弟子の畫に落欵するてそんなこともないが、何分混雜でもあり、また一向關はん人であつたから、門人などが自分の畫を持て來て、隅の方で頻りに先生の印を押してもくれもあり。中には先生どうかこゝの處へ落欵を、おッとよしと、碌に畫を見ずに落欵したり。畫印なども小さな匣に入れて、其邊に置てあるから、一寸其印を……をーい、と他の弟子が拋つてやるといふ鹽梅で、時によると三幅對が皆僞物であつたといふようなことがある。夫で道具屋などが時々畫を持て來て、先生、これは先生の落欵が入つて居りますが、どうも僞物らしく餘り惡ふムいますから、他の道具屋に懸てあつたを取て來ましたので、どうでムいますよも先生がお描きになつたのでムいますまいなと云ふと、文晁が其畫をひろげて見て、ウー、已が描たか描かんか覺へんが、文晁と落欵があつたら大概描たのぢやろぢい。と、一向頓着しない。他の畫の鑒定を賴みに來るものがあつても此流で、ウー探幽と書てあるから、探幽ぢやろぢい。へイそれで此畫はどうでムいます、ようムいますか惡ふムいますか。さア大概よいのぢやろぢい。といふ鹽梅だから、終には誰も鑒定を賴みに來るものがなくなつた。またあれを眞正にしてねたら、そりや五月蠅て堪つたものぢやない、アハヽヽヽ。と、大笑ひす。

そこで感心なことには、彼ほどの大家であるが、觀音一つ描くのでも月一つ描くのでも、必らず古人の粉本を見なければ勝手に描かん。其粉本は南部行李に入れて、番號を打て棚の上に幷べてあるので、月一つ描くにも、をい其何番の探幽の月を出せといふ搨梅で、其粉本を出さして見て、夫から畫を描く。門人などが大勢見てゐる前で、……そこで或人が、先生程の方が畫をお描きなさるに、一々粉本によらんでもよいではムらんかと云ふと。そうだ、已れは粉本によ

らんでも畫は描ける。然し今の若い者は、兎角師とすべきものを離れて、我まゝに畫を描きたがる。この師とすべきものを離れて、我まゝに描くものは到底其師に及ばない。師とすべきものは飽まで見て、そうして十分心を用ひて筆を把るものは、遂に師よりも勝ることがある。己れが一つの畫を描くにも、一々粉本を出さして見るのは、門人などにこゝの道理を示さんばかりで、何の粉本より己の方が、よつぽどよいことが澤山あると云つた。と、一世の大家として、多くの門人を薫陶提撕するには、時に這般の手段なかるべからず。而も文晁は粉本を致して、粉本に致されず、幾多繩縛の裡、別に逍遙自在の閑天地を放出す。固より世の一意死格を蹈襲し、終生粉本を模倣する者と、全一に語るべからざるなり。

翁また曰く。前に云ふたように、其頃文晁の勢力が盛んなものぢやから、畫家が皆文の字をつける。いや文何だの、文菊だのと、文の字の大流行で、門人でないものまでが、文の字をつけて門人の顔をする。私も其時は文齋といつたので、……處が、世話になつてゐた酒井右近といふ人の家は、林家とも縁故があつて、どうも讀書の一つもするものが、文晁のような俗な畫を學ぶといふことはない。讀書人がやるには、是非南畫に限るといふので、夫からまた文晁をやめて、高久靄崖と云ひ、其頃南畫で名高い畫家の門に入つた。處がをかしいのは、此靄崖が南宗ではあるが、また文晁の弟子で。……こゝになると、文晁などといふ人は逆つたもので、靄崖に向つて、ムヽ、汝の處へ文齋がいつたそうなが、あれは行末見込のある男だから、十分教へてやつてくれと、自分の處を出たのは毫も怒らずに頼んでくれた。そこで靄崖も骨折て教へてくれましたが、どうも文齋といふ名も面白くないで、已が改てやろう。古語に青は藍より出て藍よりも青しといふことがある。汝は已より上手になるかも知れんから、其

藍と、霧崖のあいをとつておやが、霧崖の霧はもやであるから、一層草冠りの霧とした方がよい、霧は盛んなり、山の茂つて青々した形容で目出度い。また已は崖であるが、汝は山にするがよい、そこで霧山がよかろうといふので、霧山とつけてくれました。尤も霧崖の處へは、大橋淡雅だの、渡邊華山などが遊びに來ましたので、山の字はこの華山の山もとつたつもりです、アハヽヽ。と、嗚呼、文晁の出門の弟子を怒らず、却て懇ろに囑せる、霧崖のまた己れの弟子に向て、已れに勝るの佳號を與へ、以て其前途を祝する、いづれも胸襟の脫洒にして、傲に無我の境に入るを見る。余は聞てこゝに至り、坐ろに古人の高風を緬想して、欽仰に堪へざる者ありき。

翁は語を次で曰く、そこで十八九の頃から、二十五位まで霧崖について畫を學び、夫から大阪へ行つて、篠崎小竹の塾に入りました。二十六の歳であつたか、鎭西から長崎へかけて遊歴に出かけましたが、其時に小竹が詩を作つて贈つてくれました、さア之を持て行けと、其詩に曰く。

送霧山谷口貞二西遊

霧山爲人如其號。情貌藹然被人好。乘春出山入東都。講法兼得霧崖敎。朝來從我讀詩書。欲令用筆俗習除。不迷花柳不耽酒。立志不小能確如。今將西遊窮眼界。山水知汝更進書。到處逢人若相怪。須以余詩爲紹介。

甲辰春三月　小竹散人弼

詩は固より嘲嗟の作なるべく、いかにも俚俗平凡なりと雖も、而かも翁が青年時の性行を徵すべきあるを以て、暫らく小照に充て之を錄す。

詩は裝潢して扁額となし、楣間に揭けあり。翁指ざして曰く、其時關西三十三ヶ國で、篠崎小竹といへばなか〳〵名聲の轟ろいたもの

ですから、此詩を持て行て、到る處で便宜を得ました。夫から諸國を遊歴して長崎に出で、こゝで淸客の陳逸舟といふについて、四君子、其他の畫法を問ひました。

それから丙午の歳だから、二十九であつたか、長崎で淸人に就て學んだと、大天狗になつて江戸へ歸りがけに、京都へよつて貴名菘翁の處へ行つた處が。菘翁が大に喜んでくれて、まアよう無事で歸つた、定めて畫も上達したであろう、どれ一枚描て見せいとのこと。いや一向上達も致しませんがと、口ではいふてゐるものゝ、腹は大天狗であるから、其日旅宿に歸つて一枚の畫を描き、翌朝菘翁の處へ持つて行くと。菘翁がつく〳〵見て、……ムゝ、これでは前より畫が惡くなつた、こんな風に描てはいかん。と、自分の所藏の名畫を出して、示してくれました。それで、汝は之からどうする氣だと云ひますから、今日にも大津へ出て、直に江戸へ歸るつもりですと云ふと。そりやいかん、今江戸では、文晁も鵬崖も沒して誰もゐない。其居ない處へ歸つて、自慢するのは男でないぞ。まア暫時此地に居よ。へい、此地に居よと仰しやつても、京都では兎ても敝書生が暮しがつきませぬから。なにそう云ふたものでもない、また已も世話してやるから。と、夫から菘翁の口入で、松葉屋といふものゝ世話になつて、足を此地にとゝめてから、つい其まゝ妻も出來、子も出來て、今日では早や五十年餘りになります。尤も其間に、金が無くなつて來ると、諸國へ遊歴に出たことは度々ありますが、アハ、、、。

余問ふ。御見受申せば、八十二の今日で、お顏色も艶々してゐらつしやいますが、以前から御身体は康健であつたのでムいますか。翁曰く、そうでムいます、隨分身体は以前から康健の方で、夜通しに、伊勢から京都まで逃て歸つたこともありますから。はア、夫はどの樣

なとで。翁笑つて曰く、維新前のことで、尊王攘夷などゝ日本中が大騒ぎで、其時に伊勢大神宮へ勅使が立ち、柳原、藤波、橋本などゝいふ公卿さんがおいでになつて、私も其お供をして伊勢へ行ました。夫で二見浦近邊の、臺場の圖を描かされて、藤堂侯からは一行を饗應があつたが。その席で藤堂侯が、私が文晁についたと云ふことを聞て、夫は面白い。已も文晁に竹を學んだことがある、どうか歸りには是非津へよつていくれ、馳走するから、決して素通りはならぬぞとのことで、……ハイ、藤堂高猷といふて、大層風流な方でムいました。それから歸途に津を通つたが、もう寄らんとおこうと思ふて、實は只今御城下を通りますが、少し差急きますれば、此まゝ御免を蒙むりますと屆けると。いや、夫はいかん、侯には疾に御待兼だといふことで、津の山莊へ招かれて饗應になりましたが。諸臣など列坐の前で、さァ一杯遣はそう、……返杯せいと、極く親しく御言葉があつて、之から汝と寄合畫をせうと、侯はまづお畫きになり、さアこれへ何か畫けとのことでムいましたが。私は大層醉てゐましたから、さッと墨をつけて縱横に筆を走らした處が、侯の御畫きになつた上までやつつけていしもうた。そこで北川とかいふ藩士が大に怒つて、君侯のお畫きになつた上へ、已れが畫くとは無禮な奴だ、打斬てしもうと、刀を拔きかけましたから、酒の醉も何も醒てしもふて、斬れてはたまらんと、一生懸命に逃出したが。後ろを振顧ると、凡そ一丁許は追かけて來たようだ。夫から夜通しに京都へ逃て歸つたが、どうも何だか心地が惡い。

すると、一月許過て、……其頃は私が三本樹に居りましたが。他へ出て歸つて來ると、留守中に藤堂家からと云ふて、立派な進物が來てゐり、今夕でも御歸りになつたら、是非御目にかゝりたいから、どうか三本樹の某樓まで來て下さる樣との言殘しであつたから、はァ、

遣つて來よつたな。然しこうなつて、生じか逃隠れも出來ぬから、打れたら打れるまでのことだと度胸を定めて、平服のまゝで某樓へ行くと。どうか此方へと、上座にすゝめて、氣味の悪い程丁寧だ。はゝア、こうしておいて打れるのか知らんと、まづ云ふまゝに坐について、時に先般は眞に酩酊の上で、失禮をと云ひかけると。否、其事はどうぞもうお言ひ下さるな。實は君侯から、其許に宜しく申していくれ。また余に代つて、何なりと其許の好な物を饗應せいとの仰付で、夫故先刻も御留守宅へ進物を置て歸つた次第でムるから、どうかお心置なく、飲つて下さるようと、案外なことで大層饗應に逢て歸りましたが。維新後になつて、私を打斬るといふた北川といふ藩士も、朝廷へ徵れて史生になり、私の家へ來ましたから、やア先年はまことに失禮をと、互ひに笑つたことがありました、アハ、、、。と、翁が大醉淋漓、盤礴放筆の狀は、畫家の狂態として强ち奇とするに足らざるも。之に北川の激怒刀を拔て起てる、藤堂侯の雅量使を遣はして慰撫するを加へ、遂に一番の佳話をなす。而かも其刀を拔て追はれ、且つ顧み且つ走るの際に當つては、三魂天に飛び、六魄地に錯し、豈にまた今日の所謂佳話なるものあらんや。人事の變幻轉倒する、遂に之を測度すべからざるなり。呵々。

之より談は横井小楠、藤本鐵石、其他翁が交遊の逸事に移り、興趣津々盡きず、談話二時半許、卽ち辭し歸る。

久保田米僊氏

昨丙申の晩秋頃なりしと覺ゆ。畫伯久保田米僊氏東都より來り、暫らく三本木の某樓に寓するや、一日余は親友岡本逍遙と共に之を訪ふ。會ま氏は外出して面するを得ず。其後數日を經て、余は逍遙と祇園祠畔の旗亭にあり、偶然にも氏が隣室に在るに逢ふ。逍遙同と

畫に於て氏と師弟の誼あり、掌を抵して其奇遇を稱し、余を引て相面せしむ。杯酒歡洽、頗る想望の渴を慰すと雖も、未だ其底蘊を叩くに至らずして、匆々に手を分ちたりき。

其後再び氏を訪はんと欲して果さず。間もなく氏は東都に歸り、暫らく相面するの機會を得ざりき。本月に至り、氏はまた畫筆を載せて西都に來り、暫らく逍遙の家に寓し、次で祇園祠畔の某家に轉ず。

余乃ち二回氏を訪ひ、而して二回相逢はず。寓居の家人輙ち曰く、先生昨夜より未だ歸らず。曰く、本夜も定めて……。蓋し氏は腰纏十万去て楊州の鶴に跨り、粉園香陣の裡當に得意の伎倆を揮ひつゝあるなるべし。紫痴余の加きも此毒氣に中りては、また那邊かに向つて小紅を訪はんと欲しき。呵々。

去る七日、氏は折柬して余、及び逍遙を招く。曰く、幾回か來訪を得て幾回か相逢はず。願はくは本夕枉駕せよ、聊か杯酒を暖めて所懷を語らん。と、余乃ち逍遙と共に之を訪ひ、漸やく禿頭の情人に面するを得たり。

氏は久濶を叙し終るや否、驀地に余を顧りみて曰く、どうも酷いじやありませんか、共進會の批評は……。逍遙また余と合評せるの一人。曰く、私は一向惡口はつかないですが。余曰く、そうは言はせない。

と、三人相見て哄然。

氏尙も笑て曰く、どうも酷い、實に傍若無人だ。と、左右を顧りみ古鎧一領を出して示す。曰く、近日購ふ處。と、余戲むれて曰く、之を一着して陣頭に立たば、批評の矢尖なんぞは……。氏曰く、君にして東京に來らば、先づ箱根の切所にて遠矢にかけて射倒さんのみ。

と、一座また絶倒す。

晤談漸やく興に入りて、氏は曰く、さらば何處かに趣むかん。と、相携さへて全家を出で、祇園烏居本樓に上る。室靜に、庭幽に、隔

室の絃聲も雅談を擾るに至らず。須臾にして美酒來り、佳肴出で、三人對酌少時。余乃ち氏に向ひ、改めて氏が經歴、及び所懷を示されんを乞ふ。氏曰く、マア、もう一二杯傾むけてからと、杯を余に屬して、徐ろに語つて曰く、私は當地の錦小路東洞院西入る、元法然寺町で生れたのです。親父の商賣は小さな料理屋で、兄弟といふはちつともなく、眞の一人で。幼年よりメチヤ〳〵に畫が好でわつて、寺子屋へいつても、手習ひはせずに畫ばかり描てゐる。いつでも矢立を腰にさいて、方々の白壁やら、町々の門に畫を描ちらすから、しじうケッが來る。それだから親父が怒つて、白紙は渡さん、よう〳〵寺子屋で淸書をするだけより、……すると、また寺傍輩が畫を描てくれ〳〵と、紙をくれるから、それに無暗と描たが。しまいには鐵葉の板一枚だけ許されて。之は描たら消し、〳〵すればよいのだから、……それで錦繪を見るのが大の樂しみでした。

十三の歳に、元竹田町に轉居しましたが、小料理屋の息子だから、尻を端折て、草鞋がけで歩かねばならん。それで自分も畫工になるといふ心算もなければ、親父は無論畫工にさす考へはなかつたので。すると私の十六の時に、町内の髪結が師匠(鈴木百年)の處へいつて、私が畫が好でわるといふことを話したら、師匠が夫では何か畫たものを見せいとのことで、其髪結が一枚持ていつて見せると。ウム、之なら來したらよかろとのことで、丁度十六の年の六月であつたが、親父には內密で師匠の處へいつてやり出したが、いや面白くてたまらぬ。それに見れば、畫工といふものは極のんきらしいから、こりや小料理屋の後嗣ぐよりは、どうか畫工になつて見たい、畫工になつて高尙な人に交際がして見たいと考へた。

處が、親父は家計が十分でない處からでもありませうが、小遣も十分くれず、束脩、其他學資等一切供してくれない、たゞ〳〵師匠の

處へ通ふのを默許してゐるといふ位のとで。師匠もまた、餘り助けてしてやるといふ方でなかつたのです。

其時分繪畫などいふものは貴族的嗜好で、遊藝中に數へられて、之を稽古する者も、黑紋附の羽織に、太い髻をくゝつけ、唇に墨など抹り附て、私しや畫を稽古してゐると自慢する程ですから。紺木綿の衣服に、前垂掛けの私とは伍をなしてくれない。それならば師匠の學僕と、……そうもしてくれん、やゝ薪水の勞をとるといふ程で、奔りあるいてゐたが、何分本業があるものですから、夜々休んでからでないと畫を描くとは出來なかつたです。と、當年の苦學を回想しては、氏が言語もまた極めて眞摯に、極めて平淡なりき。

氏語をついで曰く、そこで畫は追々進んでもく、畫絣や高尙な繪具が入用になつて來るが親父がしてくれむ。本業が疎そかになると云ふて、……それでどうも繪具などの錢の出處がないが、其頃堺町の四條下る處に、大安と云ふて大丸の扇店があつたから、其店へ賴んで、諸國へおろす仕入扇の畫を描かして貰ふたが、松に鶴とか、一寸其樣なものを描て、百枚で二百、天保錢が二枚であるが、それでよう〳〵學資に當てたのです。

それから段々畫は深入する、親父は益々やかましくなる、遂に親父から師匠に辭はつて、切角私が辛苦して作つた繪具も、筆も、一夜高瀨川へ捨にもきました。……其時は私も世に望みが絶へて、一層死ふかと思つた程です。そういふ都合ですから、隱れて行た處で師匠も優待してくれず、また餘りに門人を敎へるといふ方でないから、時には蘆川文鱗へ行ふと思ふたこともありましたが、夫も良心に恥る。で、先づ〳〵してゐると、親父は家内を持したら、夫で本業の方へ身を入れようと、極早く家内を持しましたが、私はついに家を飛び出しました。……左樣、二十四でしたかネ。

夫で富小路四條上る處に家を持たが、殆んど長屋住居で、二三の朋友が助けてくれましたが、宅からは一切關はぬ。而も家内を人質にとつて、……然し、斷然そこにねることしましたが、どうも食ふことが出來んから、止を得ず貿易の畫を描きました。――其時分に非常に臭しめた、……私の方はそふいふ處へもつて來て、一方には南畫が流行し初めて、其勢ひはなか〳〵盛んであるが、どうも南畫に變はるのは厭なり、此風潮に流されては堪らぬと、喰しばつたから實に非常に困難しましたので、幸野梅嶺なども、全樣に大層困つたです。そこで二年ばかりも居りましたら、親父も漸やく私の强情に折れて、宅の近傍に家があつたから、私も其處へ移りましたが、丁度それは二十六の年でした。

其頃京都の繪畫が非常に衰頽してゐましたから、私と幸野梅嶺と計つて、畫學校を興そうと思ひ、望月玉泉、巨勢小石なども贊成して、

夫から私が諸大家の處を説廻つたが、まるで今の壯士的に排斥されて、一向贊成しない。が、幸に其頃槇村の知事の時分で、大層仕事好で、西洋の事といふと喜ぶ人であつたから、夫で西洋のなど例にひいて説つけたが、今から考へて見ると、定めて不思議なことをいつたでしよ。それで畫學校が成立つて、京都府立畫學校と稱し、御苑内の日光御里坊、いゝ御殿でした、それを畫學校に充てました。そうして彌々學校が成立たから、私も畫學　出仕といふ辭令を受て、學校の爲に働ひてゐましたが、其後國會請願だの、立憲政黨に加入するのと、隨分亂暴で、とう〳〵出仕を取上げられたです。それから明治十六年に、第一繪畫共進會が東京に開けましたが、京都の畫家は主意がよく分らんで一向出品しないのを、私が説廻つて漸やくさすようになり、京都からは幸野梅嶺と、原在泉の二人が審査官で、私は京都出品人總代で一處に東京へ行つたが、幸ひに彼地

で審査官にとつてくれました。其後十八年に、第二回の共進會が開けて、其時に秀吉の名護屋陣で、陣廻りの時に朧月夜と白板に書た額を見て、沼間藤六の陣に墨がないと悟つたと云ふ、歴史畫を描いたら、其時に銀印を貰ふて、夫で漸く地位も出來、社會に少しい知られるようになつたです。

其後二十三年になつて、自費をもつて佛國巴里博覽會へもき、其畫報を京都日報に出したのを、德富氏が見ておつて。と、云ふ語を抑へ、逍遙曰く、之からは、私が云ふた方がよいでせう。德富さんは其前から私の家に泊られたが、或時に先生(米僊氏)の描た鯛の畫があつて、德富さんはあなた米僊といふ人を御存知ですかと云れるので、へい、之は私の畫の先生ですと云ふと、夫ならどうか紹介して呉とのとで、夫から德富さんと一處に先生處へねつたのです。氏曰く、そうです。其時に德富氏と情事が出來て、國民新聞を發行する相談が成立たのです。

之から後の事は、大概世間で知てゐますから、もう止しませう。夫で前年廣島で　天覽を忝けのうしてからは、大に小成に安んじて、自後畫を描くにもメチヤ〳〵にやりなぐつてゐる間に、繪畫界革新の氣運が駸々と進んで、西京でも竹内樓鳳とか、東京でも二三の若手が大にやり出したから、其刺激に狼狽へて、騒いで、失敗して、今では邪慢の角も折れて、日々熱鐵を飲む思ひです。

ひる顏に熱鐵をのむ迎へ酒

之が此頃出來た發句で、之からは大に理趣三昧をやるつもりです。と、嗚呼氏が言語の何ぞ爾く沈痛にして、其胸懷のまた何ぞ磊々たる此の如くなるや。氏が　至尊の御前に伏して絹素を拂ひ、巨毫一揮、忽ち龍蛇雲烟を走らし、其名聲の一世に喧傳するに當り、邪慢の鬼は早くも其虚に乘じて、揶揄飜弄し、夢幻三年、忽ち氏を焔騰

々地に擠陷す。(氏が自白による)常人にあつては、尙は多くは醒覺せず。假令醒覺するも、深く胸底に秘し、たゞ其聖得知せられんことを之れ恐る、誰か敢て洒然淡然、之を公言するの大勇あらんや。而して氏や優かに之を爲し、且つ理趣三昧に反らんと云ふ。此心地——此一喝——方に邪鬼を追て、聖神を來し、冥暗を消して、光明を生す、他日淸涼界の寶蓮華に安坐し、今日熱鐵を飲し苦患を回想する、また當に遠きにあらざるべし。而して氏が畫に於る、こゝに於て初めて大成せん矣。

淺酌低談三時に度り、興趣尙は盡きず。更に三人相携へ、楊柳門巷深き處に沒し去りしも、こは記する限りにあらず。對談の日は、明治丁酉、六月七日。

內海吉堂氏

仝年六月二十二日、畫伯內海吉堂氏を烏丸六角下るの邸に訪ひ、導ひかれて其畫樓に上る。氏方に縑上に竹を描きつゝあり、筆をとゝめ久濶を叙し、茗を煮て徐ろに談ず。乃ち余の問に答へて曰く、私の生國は越前の敦賀で、代々畫工でありまして、親父は元紀といひ、豐彥の門人でありました。それで盪川文麟も親父と仝門で、至て懇意でありましたから、息子を此地へよこしたらよからふとのことで、未だ私が小供上りで、十二の時から盪川の家へ參りましたが。彼是年配も仝じであり、原在泉氏の前髮立の頃から知合であります。元來豐彥は吳春の門人でありますが、仝じ四條派でも、景文の畫は秀美でありるが、豐彥の畫はきたなふて淑のある方で、常に儒醫小石玄瑞とか、其他讀書人と交はつて、唐本の畫論なども讀んで、隨分其方の書物はあつたそうです。それで一種の癖があつて、坐右の文房

具から、其他一切支那物に限るといふことでありましたが。其弟子で師匠文鼎は無論四條派でありますが、精神はやはり支那で、晩年になつて蕪村を學びましたが、もと〳〵支那好ですから、西園雅集とか、飲中八仙のやうなものになると、芦雪や南岳と違ふて、其時代と人物の風采など熟慮して描くといふ方で。……支那の樓閣人物は、殊によく描きました。

そのそうり、師匠も純粋の支那好であつて、また私の親ぞその親父も、椿山、蕭崖などに交はつて、そろ〳〵南畫に足を入れる、旁々私が後年に支那を漫遊しましたのも、一朝一夕の思ひ立でないので、其因て來る處は、マア……遠く且つ久しいのであります。

それで私が支那漫遊に出かけましたのが、明治十年で、三十五の歳でありましたが。其前から三四年國に歸つて居りまして、いよ〳〵出かけるにつき、師匠に告別の爲め京都へ來うと思つてゐる處へ、師匠が大病で六かしいと報知して來ましたから、急いで馳つけて參りましたが、もう間にあいませんで、……夫で葬禮の供には立ました。

……其頃は西郷の戰爭の時分で、東本願寺の先門主が九州へ下られて、私も全寺の上海別院に寄宿する許を得ましたから、先門主の御供をしていつた幸野梅嶺と、全船で參りましたが。丁度梅雨の頃で、神戸から船に乘て長崎に寄り、夫から上海に趣むきました。

上海には三年許り居り、それから蘇州杭州の方へ入りましたが。何分支那は咸豐年間、長髮賊の亂後で、賊の足跡至らぬ限なく、殊に彼は天主教を奉じておつたものですから、支那にある道教の道觀、佛寺の偶像などは、片つぱしから毀壞したり燒たりして、佛像などはどんな深山幽谷にあるものでも免がるものはなく、天然の巖壁に彫刻してある佛像は、悉く毀壞すといふことが出來ぬから、頭だけでも缺くとか、何とかして完存するものは一つもない。——皆木妖など

と名をつけて、――隨つて書畫や、何もかもいつたものでなく、ぞんぞん燒たり破つたりしましたから、古物といふは極めて稀です。……

それで長髮賊は十一年間も南京に都して、蘇州杭州など賊の圍中にありましたから、私の參つた時でも、蘇杭兩州の城郭內三分は、瓦礫堆をなして、極めて荒涼凄酸の光景でした。

それで杭州にも三年程居りましたが。こゝは三面が山で、一面が城郭になつて、郭門を出ると直に有名な西湖です。西湖は大さが周圍三十里といふので、これは六町一里ですから、日本の里數にして纔かに五里で、對岸の山は一里半許りの處でよく見へます。夫で湖中には林和靖の棲でゐた孤山だの、湖心亭、三潭印月などと、三つはとも島がわり、白樂天の築いた白堤、蘇東坡の作つた蘇堤などが隱見し、其外あちもゐる神社佛閣が、周圍の山に建つまり、湖邊其他も貴紳墨客の別墅とか、酒樓茶館抔で、殆んど塵俗の氣は絕てゐるはとです。また錢塘江は西湖と一里足らずの處で、之はなか〳〵大きいが、西湖附邊の山に上つて見ると、西湖はまるで泉水のようで、錢塘江は渺々としてゐますが、丁度叡山に上つて一方は琵琶湖を望み、一方に小椋池からかけて京都を瞰下したようです。それで錢塘江は赤水でわるが、西湖は水も清いし、この京都に比しても景色は勝つてゐるようです。

衣服ですか、衣服は上海に居りました初めは、日本服でゐましたが、段々持てゐつた衣服は弊くなる、止を得ず向ふの服を着て、便宜の爲に頭も辮髮にし、冠婚喪祭の節にも度々よばれる、言葉も自然に覺へて來る、まるで向ふの者仝樣にして暮してゐました。夫で畫の師といふものは別に定めず、只多くの畫家墨客につきあつて、其畫を臨摸したりしましたので、こゝにあるのも其一です。と、座右の畫帖をとつて示さる。拔ひて之を閲するに、蘭竹、花鳥、其他諸の

畫を臨摸せるものにて、一は當時に於る支那の畫風を徵すべく、一は以て氏が研鑽刻苦の痕跡を見るべし。

氏曰く、上海は商業上の大市で、俗地でありますから、こゝには寶書畫家、即ち書畫で喰てもくものが多く集まつて、其畫も大抵濃彩の花鳥です。杭州抔では、また學者で、餘事に畫を描くといふようなものが多く、隨分風致の高尚な山水畫も見ることがあります。こゝでは仇英、戴文進などといふ所謂ゑかき家の畫は擯斥して、胸中に面白き氣象のある唐伯虎、文待詔等などの畫を尊びます。

氏また曰く、私が明治十年に支那へ參りました時分は、まだ日本でなか〳〵南畫が流行つておりましたが、上海へゐつて見ると、畫がからりと變つて大に失望しました。なれど見る處で學ばねばならぬからやつておりましたが、明治十五年に歸朝して、全年官設で繪畫共進會が開けましたが、恰かも南畫の屏息する第一着で……。

全体昔は諸大名といふか花主が澤山ありまーたから、土佐、狩野に、圓山、四條派、何でも流行りました。また一方には大雅、蕪村、竹洞、春琴、梅逸抔といふも全じく用ひられました。然るに維新前、尊王攘夷などゝ云ひ出してから、世間の人氣は總て殺伐になつて、今の台閣諸公を初め、其頃血氣の志士といふは大抵漢學をやつた人で、上手下手はありますが詩の一首もつくる、蘭竹の一つも描くゝまして殺伐の眼で見ると四條派の密畫などは俗だとなつて、自づと水墨の南畫が流行つて參りました。それも眞正の南畫ではなく、鄭板橋等一派の、――繪畫からいはゝ法外の畫で――何しろ其頃山陽の書でも、一幅に三行書てあると細かすぎるといふた位です。

引續ひて維新となり、諸藩は廢される、結構な蒔繪も金潰しとなる、古畫抔も二足三文にあつて、有もる日本の美術工藝は破壞される、襲の志士等は台閣の要地を占め、相變らず南畫は非常な勢ひであり

ましたが。明治七八年頃になつて、今の福澤翁等がそろ〳〵新聞で南畫を攻擊し初めた。なれどまだ南畫はなか〳〵衰へないで、明治十年頃に五岳、老山、晴湖などが大に流行しておりました。

その後西洋へ行た學者などがぼつ〳〵歸朝して、どうもつくね芋のやうな山水は面白くないとか、繪畫でないとか、西洋の見聞上から追々攻擊し初める。明治十五年に政府で開設した繪畫共進會も、此方針で南畫を抑へる樣にしましたから、こゝで頓に全畫の氣焰も消沮して、北宗の畫などがそろ〳〵頭を擡て來ました。然しまだ其頃は當地の骨董家でも、陳列してあるのは支那畫が重で、たゞ西洋人が買ふといふから、應擧や吳春の畫も賣出しましたが。夫が六年、八年、九年となつて段々と好み手が多くなり、稍や四條風の勢を挽回する。今度はフエノロサ氏や、九鬼さんが古畫を唱へ出して、啓書記、雪舟、周文などが世に出る。次で西洋人が日本の風俗、並に

彫刻印刷の參考になると錦畫を買出してから、歌麿も出る。師宣も出る。引つゞいて北齋も、豐國も出るといふ盛梅で、また亞時のような形勢になつたのであります。と、氏が繪畫に於る好尙の變遷を論ずる處、井然灑然、毫も窒礙なく、恰かも掌上の紋理を指すが如し。蓋し平日より深く斯道に留意せると、且つ理會咀嚼の力の、汎々たる時流に拔く一頭地なるに非ざれば、決してこゝに至らざるべし。余はこれ等の點に於て吾吉堂氏に服す。

氏また曰く、當時の畫は細かく筆を働らかして、寫生を力めますが、雅俗の差別が分明ならぬ爲め、風趣は稍や下るようです。中には櫻花に鳥の圖などつくるものがありますが、鳥とて櫻樹にとまらぬとはない。また白い花に黑い鳥で、彩色の調和も惡くはありませんが、然し、花の散るを惜むが人情であるに、そこへ鳥をバタつかせて何の面白味がありますか、これ等は沒分曉の甚しいものです。私の考

へには、一つの畫を描くにも、古人の詩歌俳句などを透して、天地問の物、卽ち山水、人物、四時の天候などを觀察し、鶉といへば深草の里とか、山吹といへば下に流れを描て六の玉川をきかせるとかいふ、土佐家などでやりますあの風にすれば、其間に僞永の趣致が生じて來る。固よりそれに拘はつてはいかぬが、古名人がよい處を見ておいたものによつて、之を畫に表現す樣にすれば、自ら先に申した櫻花に烏のような、殺風景な考がへはなくならふかと思ひます。と、之また繪畫の俚俗を醫すゝ一法ならむ。されど流弊の至る處、また藥に因て病を生ずるを免かれざゝべし。

氏又曰く、近頃歴史畫につきましては、衣冠甲冑より、建築物等に至るまで、其調査は極めて精密で、殆んど古來未曾有であり。また佛畫なども東京の畫家は、頗る面目を一新するに至りましたが、たゝ支那の事物についても、頗る闕如たるの憾みがあります。先年某畫伯の描かれました桃李園に獨樂園、……両圖とも空濶な郊野山麓といふ布置で、周圍に墻垣の設けがありませんでしたが、……全体園といふても、たゝ畝といふでなく、富人大官の別業であるといふとは其記文でゝも分つております。また知恩院の什物である仇英の桃李園圖、金谷園圖を觀ても、大抵地形が察しられまする。されば墻垣のない別業とは、隨分杜撰なはなしで。また舟の蓬も、狩野以來往々藁の蓬を描て、唐人物がこれに乘てゐますが、あの蓬といふものは、必ず竹でもつて編だものので。また櫓の形狀から、操つり方、其他屋根の瓦まで、皆日本と違つておるといふことを知らず無暗に畫てあります。この樣なとは、たとへ支那へ行かないにしても、彼方の山水人物を描くには、漢畫に據て考究すべきと思ひます。まして五洲來往の今日で、支那などは一葦之に航して行かれる處ですから、今少し注意のありたいとと思ひます。と、此處支那通たる氏の篤論

と謂ふべし。

氏今年四十八歳、方面大耳、重厚の氣眉宇に露はれ、言語は含み聲にして且つ捷し。談論、其他の書に於て、頗る造詣する處ありといふ。談話三時許、乃ち辭し歸る。

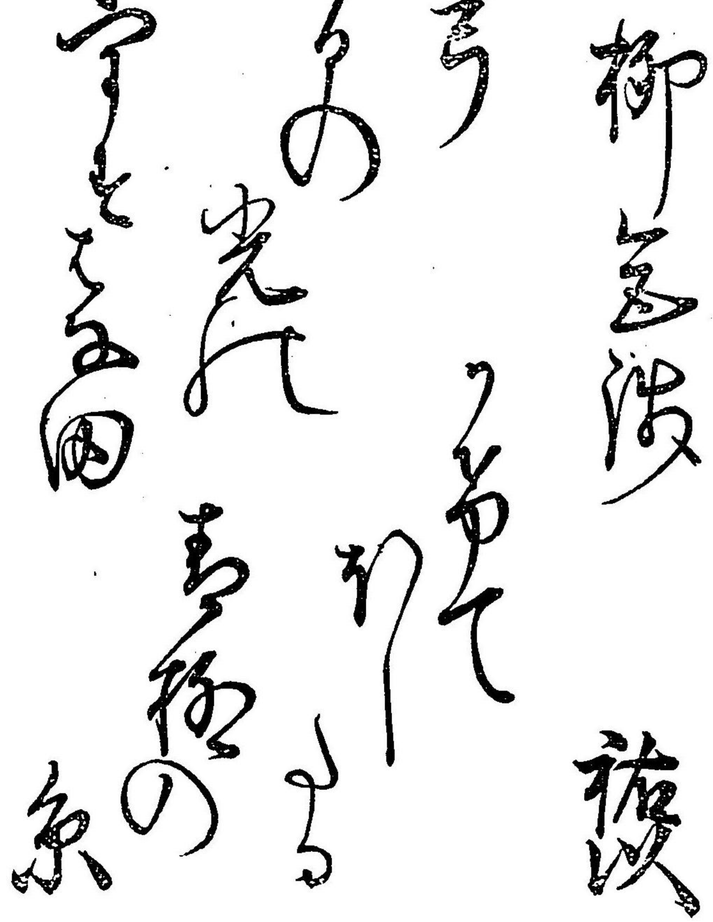
赤松祐以翁

仝年七月六日、歌人赤松祐以翁を下京稻荷町の宅に訪ふ。軒端の紫陽花は今を盛りと咲誇り、さいやかなる園に菊苗などの植られたるいとやさし。刺を通じ謁を請ひ、許されて其書室に入る。翁今年七十二歳、眉秀で、鼻梁高く、風骨珊々として、秀氣掬すべし。白地の絺衣を着し、机に凭り、懇ごろに余に接す。曰く、時世がこうなりましたので、こんなしみつたれたとしておりますが。と、之れ其勞頭の語なりき。

談は維新前の舊事に入り、翁曰く、慶喜公が二條の城を退去されたる後などは、城垣は頽れてある、其邊は雜草が生茂る、晝も人通りが尠なふて强盜が出るほどで、いやどうなることかと思ふてゐましたが、何事も案じの外で、こんなけつこうな御代となりましたも、全たく王政のお蔭と存じます。……伏見鳥羽の戰爭の時分は、まだ私も年が若ふて見にもきましたが、いや緋威の鎧着て首のないのもあれは、羽織袴で首のないのがある、そうかと思へば筒袖のもあり、大砲や硝藥はそこらにごろ〳〵あつて何ぼでも拾へました、ヂッホッホ。……甲冑を着たのは、……薩州が一度朝敵のようになつて、京都を退去しました時に、皆甲冑で下へくだりましたのが、大抵其終りでございます。

歌は朝廷で御用ひになりましたのが、二條家ばかりでムりました。

この二條家といふは、定家卿の子が爲家で、この爲家に四五人の子



があつて、長子が爲氏といひ、これが二條家の祖でございます。また其末子が爲相で、これが冷泉家の祖になります。然るに兄弟中が惡ふて、……爲氏の子孫はなんぼもムりまして、足利の三代頃になりますか、北朝後圓融院の時に、勅撰の撰集がありましたが、其時爲重といふが餘り得手勝手をして暗殺に逢ひ、遂に家が絶へてしまいましたが。其歌の流れといふのが、有栖川宮、飛鳥井家などに傳はり、夫から常縁だの、宗祇だの、また細川幽齋抔と古今傳授がムりまして、遂にまた朝廷へ入りましたので。其他流儀は冷泉だの、三條西だの、中院などゝ澤山あり、また近世の歌人のとは枚擧に暇ないほどでムります。

然し其流儀といふも歌の体で、所謂規則と癖で、これは人々違ひます。今の歌人といふは、大抵八代の集も讀ぬが多く、まして万葉などは餘り見るものもムりませんが、……夫でも歌は出來ます、ナッホ

ッホ。どうも之も今の人氣でどもならんので、ヨッホッホ。

歌は禁庭に披講があつて、やはり聲あげて歌ふので、これは定まつた音調があるので厶ります。天保頃には、三四人集會しますと、やはり時に依て歌ひましたもので。近頃また昔になつて、人の歌を見てすぐに歌ふのもあります、之は式のあるとで、そう無暗に歌ひますもちと、ヨッホッホ。

歌の中山の尙綱といふ人の處へお出やしたか、そうですか、一度お出やす、杜宇が鳴てようございますせ。……この人は、私か四十年來の相識で、古の歌のことはよう知て居ります。

書物は一度當地で兵火に逢ひまして、其後九州へ行くと、西郷の乱に逢ひ、すつかり失しましたが、其後またぼつ〳〵買集めましたので。いや火事にも逢ふ、地震にも逢ふ、逢はぬは海嘯ばかりで、浮世の辛酸は一通り嘗めました、ヨッホッホ。

晤談の何となく、方丈記を讀で鴨の長明と語る如きも心からにや。女弟子と覺しきが、翠簾の彼方、こゝも紫陽花のほのめける邊に語ろふ如きも、淸女の筆に入らばやさしきものゝ一つなるべし。浮世の外の物語りに一時許り費やし、やがて辭し歸る。

不識庵聽秋氏

仝年七月八日、俳家花本十一世、不識庵聽秋氏を押小路通麩屋町西入るの梅黃社に訪ひ、導びかれて一室に入る。回顧すれば、余の初て氏と相識るや、實に四五年前にありき。當時余はさゝなみの滋賀の舊都に在り。會々尾崎紅葉氏の西都に來り、巖谷漣山人の宅に寓するを聞き、書を飛して共に來遊せんことを勸む。山人返書あり、曰く、後の月見に二三人もく。と、當日山人は不識庵聽秋、尾崎紅葉、堀江松華の三氏と共に車を驅て至る。余乃ち宮脇五松、西川峽陽二

子と共に、諸氏を迎へて長等山相宜亭に宴を張る。時方に舊暦後の月前一夕、秋氣蕭索として西風樹梢を度り、暮雲餘紅を收めて、湖山は暝煙の中に落つ、頭を仰げば明月は既に檐頭にあり。一座歡然、酒を酌で唱酬時を移す。

秋瘦せて小寒き月の湖と山　聽秋
一まはり三上は瘦せて後の月　小波
漁火の影稍さむし後の月　松華
下戸一人月に端居の寒さかな　紅葉
相宜亭小集　天外

長等山頭倚綺樓。賓朋一座盡名流。劇談如湧燭頻剔。痛飲似澆杯不留。煙樹蒼茫月痕淡。澄湖浩渺厂聲幽。詩成直擬彩毫寫。墨氣淋漓驕素秋。

これはその圖欒得がたし後の月　天外

それより書畫の寄合がき、天狗俳諧に、どつと笑ふ聲は山神を驚ろかし、翌日は舟を琵湖に浮べ、唐崎に花よりおぼろの眺めを賞し、三井山下疏渠の畔に手を別ちたるは、蓋しまた一時の風流韻事なりき。其後余は京都に來り、時々聽秋氏と相會す、氏輒ち喝々として前度の清遊を說く。此日相面するや、談はまた當時に及ぶ。曰く、あれはその遊びはなか〳〵出來ません。と、然り、今や小波は東京に去り、紅葉復來らず、其他五松、峽陽など互ひに相隔離し、當年の如き團欒清遊はまた得易しとなさず、夢痕鴻爪、自づから情懷の依々たるを禁じ得ざるなり。

余は更に語端を改め、氏の經歴を叩く。氏曰く、私はもと美濃の大垣で、戸田家の臣でムいまして、維新の際私の叔父小原是水(鐵心)が、朝廷に徵されて參與となりましたから、私も夫につれられて京阪の間に居り、故の木戸公や、大久保公などにも世話になりましたが、

其頃は未だ十五六で、ムチヤクチヤに議論が好きで、それで木戸公に戒しめられたことがムります。其後今の箕作麟祥、其頃は貞一郎と云ひましたが、神戸で塾を開ひて居つて其塾に居り、後大坂で陸軍士官學校が出來て、諸藩から生徒を募りました時に、私も舊藩から撰に中つて入校しましたが、當時科目の外の書物を讀まさぬとのことで、生徒一同がストライキを起し、私なども乱暴の主張者と認められて、放逐されました。其後東京へ行て大學南校に入り、鳩山、松本などと學友でありましたが、病氣に罹つて止を得ず退學し、夫から京都に來て餘命を全する爲に、樂みかた〳〵故の花の本芹舍の門に入て、俳諧發句を學びましたが、いつの間にか知らん間に、つい宗匠となりましたので、……そうです、芹舍には十年はどついて居りました。これが私の俳諧師になるまでの經歴でムいます。

夫で私が明治二十三年に、花の本の嗣號を許されましたことに先だち、花の本について少し御談し致しますれば、第一世貞德が初めて花の本の勅許ありましてから、代々相續いて、私で十一世になりますので、其歴代の人名と、其一句づゝ擧ますれば。

草も木も目出度さうなり今朝の春　第一世　逍遥軒　貞德

これは〳〵とはかり花の吉野山　第二世　一囊軒　貞室

古池や蛙とひこむ水の音　第三世　芭蕉庵　桃青

陽炎にもらるゝ芥子の一重かな　第四世　暮雨庵　曉臺

やつと來た元日は只一日かな　第五世　自然庵　鳳朗

我焚し煙は人の秋の暮　第六世　對塔庵　蒼虬

はつ蝶やもやし畑の菰の端　第七世　實祇園　梅室

蚊屋もれて團扇の上の月夜かな　第八世　比良城　林曹

鳴子繩つとぶて窓へ入日かな　第九世　麥慰舍　梅通

きゝに來て思ひかけなし時鳥　第十世　泮水園　芹舍

雪二日うき世も遠くなりけり　第十世　不識庵　聽　秋

箇樣でムいますが。第十世芹舍の沒後、しかも其死去を發表した當日に、稻雄といふが自立して花の本を稱へ、他にも全じく花の本を稱へる者が出て、一時に二三人の花の本が出來たといふ奇觀でムいましたが。貞德以後花の本をお許しになる二條家では、少しも御存知ないので、免に角其撰拔にお困りでムいましたが、私は叔父是水が二條家へも度々上りました緣故で、公爵も御存知でムりますなり、餘り老人では現今亂雜に成てゐる俳道を矯正することが出來ぬから、どうだ汝やつてはとの恩命でムいましたなれど、私は思ふ旨わつて御辭退申し上げましたが。其翌年になりまして、再應の御勸めで、從來花の本は京都ばかりで嗣で、兎に角一つの名物となつてゐるに、若し他地のものに嗣すようになつては殘念だからとの、忝けなき仰せもありましたから、以前花の本といふは、其人一代稱へて、沒後でなければ次の者がなれませんなんだのを、私は五年なり十年なり致し、其中に然るべき人があれば、何時にても讓るといふことに定めて御受けを致しましたのが、丁度二十三年の十一月二十九日で、夫から嗣號の披露會は、翌二十四年五月三日に、寺町大雲院に於て古例の通り行なひました。其時の私の句が、

流れ汲む身も恥かしや花の蔭

道遠し我身に重き雪の笠

でございましたが。其の後花の本を稱へた稻雄は何處かへ行き、外の者も稱へなくなつて、今では私の外に花の本はムりません。

談は一轉して、子規等一派、所謂新派の發句に及ぶ。氏鬚を掀して曰く、吾々の信ずる處を以てすれば、あれは發句でない、只短かい言葉なんで、……貴君は詩をお作りなさるから、詩を以て譬へますれば、韻もふます、平仄も關はず、それで只漫然と二十字、若くは二

十八字並べて、之が詩であると謂へますか、詩に法則ある以上は、決して之を詩と許すことは出來ますまい。發句も其通りで、いや季を入るとか、切字とか、其他發句には又いろ〳〵發句の法則があるので。夫を關はず勝手次第に作つて、これが發句であると謂つても、私は認めることが出來ませむ。

夫でまた彼派では、發句は十七字に限らぬ。十九字でも、二十字でも、乃至三十字まではよい、三十一字になれば和歌の領分に踏こむからいけないが抔といふて、無暗に長いのがある。其極端の句を擧げますれば、

藤の花手にとつて見れば手拭より長きと一寸

これは何でありますか。尤も之は其極端なものであるが、隨分類似の長い發句が多い。これで以て發句だと世間に公にするに至つては、實に呆れて言がいはれません。固より天然の音調で、どうしても止むを得ない時は、そりや十八字のも十九字のもあつて、昔より許してある。然し今の新派の長い句は、決して止むを得ないのでない、長くせずとも言廻はしの十分つくことを、それを故と長くするので。そういふ場合には、十七字より以上、一字はもとより、半字も許すとは出來ませむ。且つや發句俳諧は餘情を尙ぶものであるに、長々と言盡しては餘情といふものが無くなつて、何の妙味もないものになります。

且つまた新派の人々では、發句といふ二字も理會つてゐないかと思ひます。元來發句とは、俳諧の初めの句であるから發句で、それに脇をつけて、連歌、短歌、歌仙などとまくのです。然るに其發句が、二十五字も三十字もあれば、どうして脇を附ることが出來ますか。譬へば詩の起句が、十二字も十五字もあつては承句のつけようがない、また結句の結びようもない、遂には詩にならないようなものかと思